

もの一人も出来るまで。遠ざかつてもらいたい。さすれば世間のおもいくもよし。又子供ども出来てからい。こまさんを内へ入れても大事ない。今金五郎が義理のある身で。こなたを内へよぶとさう。部屋住の事ゆる世けんへすませ。茲をどつくり合点して。暫しの中を辛抱まで。思ひまつて見て下され。もし其中が待遠さらこまさんの心に叶ふやうな。身の爲により處を見つて。この爺が仕度して。嫁付て進ませせう。さうすりやこなたの身も落付。多の人の機嫌氣つまを取にも及ばせ。せめてつわしが禮心。氣樂よして進せたいトもの

らかにこのつ引さらぬ義理づめの。頼みにいやと云れねば。とをまらいつそわが身のあり行を。うち明んとい思ひしが。今更素性を明しなば。見下られもし殊よ又。金五郎の爲悪くらんと。おもひさだめ 小三「段々のれたのみ承まひり。何と申さんてのほをあげ ようもなく。大事のく若旦那様を。人よ悪く云せたり。あきた方へ色々な。御苦勞を懸ままも皆な私しが徒らから作つた罪でござりませ。お允しなされて下さいまし。それをマア悪らども思召はす氣樂にさせてやりませ。却つてやさしいそのたとへ。もつらならども有がたうとも。申さふ

やういござりませぬ去ながら私し。縦令外にどのやうな。結構な處がござりませうとも。楽しみ望いござりませぬ。只若旦那や皆様の御爲になります事なら。縦令でがれて死す迄も。ふつゝ思ひ切ませう。みづのうるみ聲わつと。バのりにせき舉て。正体もなく泣るる。心の中ぞ何ならん。白翁もどもに。ヤレ〜マアよく思ひ切つて下さつた。かろこびなみづ。たじけないぞや。小三どの。そのうなしさを見るがいやさに。今日行て頼まふか。明日行ていはふかと。一日〜と見合せても。とふでら。出さね。果しが付ね。心を鬼にしてわざ

讀者亦
嗚咽

く来たが。さぞ悪からう。是も身のため。うき世の義理の詮かたなき老の身。後生は願はず。縁切りよ来た罪作りわし。胸のせつな。推量して下されよ。この事篤と承知あら。けふあそと云でもない。心まかせにいつなりと。こなたの身も怪我のないよう。手ぎはよくやつてくだされ。いひ立出て「金五郎どの縁切つても。わしはやつぱり孫娘の心。この後なんぞ不自由あら。必き〜遠慮なふ。なんなりとさういつてよ。こつさしやれ。こなたさんの身の落付迄は。いつまでも私が貢ますぞや。他人と。白翁が優し〜と葉に嬉さむ

誰料
白翁亦
是一个
多恨人

まり。悲かなしやるせなままに。どかくのいらへへもせず。
 只ただうち臥ふして泣な居またる。その心根こころねの不便ふびんを。思おもひやりつゝ、白しろ
 翁おきなも。老おいの涙なみだにかき暮くれしが。心弱こころよわくてのなれどと思おもひ直ただして
 歸かへりける。小三せうざんと元もとよりお雪ゆきの事ことを。聞きておたゆゑ未すま々々。
 中なかを斷たれんぬ必定ひつじやうなり。もし縁切えんきりらるゝ事こととならば。生いてる
 たとて甲斐かひなき身みの。別わかれてつらき日ひを送おくらんより。死しして
 苦患くげんを免まぬかれんと。こゝよ覺悟かくごを極きまめしも。狭せまき女子おんなの心こころか
 ら。嗚呼あゝ是非せひもなき事ことにこそ。かゝりしほどよ乳母うせのお乳ちちは
 最前さいぜんよりの一五一十いちごじゅうを。次つぎの間まにて聞きものから。小三せうざんの胸むねの

せつなさぞ。なこそと思おもひ遣やらどよ。おのれもともに胸むねのう
 ち張裂はりさばかりの苦くるさを。こらへて忍泣しのひなむたるが今いまの中なか々
 こらへ兼かねわつと計はかり走り出いで。小三せうざんのそばへ。うづ「もしぬな
 とんご事ことなりましたねへ。あのやうにマア美うつくしく。おいと
 れど御受合うけあなすつたの。どふいふお心こころか合点あてんが参まりません。
 おぼろさんのある事ことを。なせうち明あてからうぐと。おつし
 やらぬのでござります。子こまで生なしたる戀中こひなかと。お聞きなすつた
 らお祖父おぢいさまも。無理むりに切きれらどいれつしやるまいに。今若いまわか
 旦那だんなと御縁ごえんを切きて。どうなる思おもはめしでござります。ね坊ねぼう

さんが可愛いぶざりませんか。あのた子さんの事のお案な
 さらぬか。ママどふいふお心でござります。只ひとすぢに
 大事とおもふお心。心を付るこの意見。乳母のらくこそあ
 りたけれ。小三のなまだ「やんにそなこのんふ通り。子まで
 ある身を断れる事せつないとも。悲いとも。胸の中のとりの
 くやうで。其苦しさい譬へられうか。それもる金坊のある事
 を。うち明やうと思ふたが。男の子の縁切たる、とき。男親
 に付が習ひゆへ。なま中な事いひ出して。あの子迄あちらへ
 引取れてい。若旦那も今迄よりい。なほく御苦勞が増であ

自期
 死以
 是暗
 々耗
 金之
 助之
 事一

らうし。二ツに又私しもの子を。手放しての樂しみもな
 く。さぞ日あまし淋しかうと。みれんらしいがいひ出さぬ
 も。矢張互ひの爲ばかり。又若旦那と縁切つても。わさしや
 外よどのやうな。男が有うと二人とい。馴染を重ねる氣にな
 る。のらいつがらつ迄もいまの通りに。斯してとらす心ゆゑ
 そあたもやつぱり今迄の通りよ。金坊の世話をしてくれ。
 〇〇 いふもなみだ。乳母も目をこすりながら。うべ「眞にいな
 〇〇 のあどやさき。のれ心の中を。推量いたせば致やど。私しの胸も張裂やら
 〇なる程お坊さんのある事を。おあくしなすつこの深ひお心

〇たどへ今日が日邊縁が切ても。一生切れざりといふでいな
 し。ほんの人目や浮世の義理と。お祖父さまの先刻のおとば
 少しの湯辛抱でござりませう。又お坊さんの事はおつしや
 るまでもあく。ハリア〜と御馴染なすつたものなんで他
 人と思ひませう。もつたないが私しぐ。産申したお子だと
 ぞんじます者。縦令どのやうな苦勞をいたしても。お育て申
 す氣でござりませうから。些どもお察じなさいませう。しらし
 是から若旦那の。お手が切たら舌をあきたり。色々湯苦勞あ
 そばすべらうと。それがおいたりまうござりませう。ほろり
 とれと



すため涙ぐ。小さんも浴衣の袖をみて小三「たしも今度の縁切りが。一生の身の大事だから。只何事も神任せ。悪い工をしたのぢやアなし。天道さまも見透し故今日つけ。明日いあはれ。その日の風よ任する計り。せつをひまつ。其時い。又外々思案もあらうら。それを案じてくんなさんな。今にも若旦那がお出ますつても。必ずわるい顔をしなぬで。今お祖父さんのお出ますつた事も。お知やちやア悪いよ。うバ「それの吞こんでねりますが。きんが。お祖父さまのおそれみで。お家の為や若旦那のおためといやシながら。常々換つて

有 味 疑 辭

あなたの氣強さ。お思ひ切のよさといふものは。あんまり見事でござりませから。とふも合點が参りませんと。いひれてちとどし死せる覺悟を覺られじと。いひやうのしやく。小三「アイタ、今のもやくで持病の瘡が。せうやら頭痛もさるやうなト。まくらを取て。乳母はせんかたなく。も。次の間へ立て行て。金之助のゆかたびらを。縫ふも泪でいかせらし。小さんの暫々氣を安めんと。よこよ寐ても眠られず。只胸の耳轟きて。ごやせんかくやと様々に。思ひ惱みし折からよ。隣れる家にて若ものども二三人ゑて。聲高に。浮世話の

刺三小 心頭

色々なる。中よ一人が「コウ八さん。おめへおらが向ふに
 ゐた。つとめ上りの女を見たか」△「フウ見たく。二十三四
 のい、女だつけ。あれがどふまた文でもよこしたか」□「ばか
 ァいひねへ。アノ女で此間大騒動があつたアを」△「ハテノま
 た遊でもしたのか」□「どふして〜。遊た位ならい、けれど
 首を縊つて往生したアな」△「エ、やつたかヤレ〜とん
 だ事をやらかしたは。そりやママアどふらと譯だ」□「聞ねへ
 アノ女はの。婦多川の女郎だかの。さる處の息子よ惚て〜
 惚抜て。互ひよ心を明し合て。未の女夫だ夫婦にならうと

約束をしゝが聞ねへ。その息子がおめへ内にやアのい、嫁
 があるんだアを。夫をちんでも深く匿しごまご女房の持ね
 へから。請出す〜とだまりしたが。大ふでうしよ。夫か
 おめへ相應に。金回りもい、もんだから。親父の金をひん盗
 んで。身受をしておれが長屋へ。連れて來て圍つて置ての女房
 いた、さ出まの。うら手に。おへねへら親父の大怒りで。
 上がたへやるの。田舎へやるのと大悶著よ。しゝ處がああ女
 の。女郎に似あひぬよく出來た者で。嫁が出されたり親父が
 怒つたのを聞くと。サア氣を揉で〜。息子が不埒といふも

の、嫁と出したり内がもめるも。皆なわふしが過りとのひ
 ぞく嫁に來がねをして。生て居ちやア四方八方。丸るくい
 ねへと思ツたさうで。とうく書置をして。首を縊つて死
 でしまつふから。嫁を歸し息子もそれから去。仕方がねへか
 らおとなしくなつたが。なんとその女郎の餘程氣めへ者で
 胸がら。に。第一貞女といふ女だ。△「ほんお女の鏡ごのふ水
 濟傳一百八人の中よどうのありとらな豪傑な女ごの。ある
 程女の魔の者で。外面如菩薩内心如夜叉とかあんとか。佛様
 がいわしつた通り。顔は美しくつても肝魂の恐しいのこの

る者だ。併しあの女もその息子の。一旦恩になつたら。男
 の爲や何かを思つて。死んどのの通れ名が残るが。惜の首
 をくつたかられしめへ。逆も死ぬなら潔よく。身を投る
 も中ごから。剃刀で咽をぐつとやると。鏡山の尾上と來てが
 うざにきめてゐるせ。△「さうよのふ。そこが矢張氣が弱いか
 ら。剃刀でやつたら痛からうと思つて。くつたのだらうが
 見つともなかつた。」「さうだらうく。それぢやアやつぱり
 その息子の。面汚でわふれ草だの。ほんに死ぬのもよつは
 どあんべゑものご。なんにしても怖しやく。ト。はなすを小
 三のさす

ましつくく、お「ハテ世の中にも似た事があるれば有もの。今もふひとりと」
 の話しのやうすでは。この身に似たのる辻占か。倦もあかれもせぬ中を。心に思ひぬあいにづかしが。どうママなんと云れやう。死ぬる今期も若旦那に。お腹をた立せやてい。後の世までの心懸り。ひとづ違もお不つかあし。ア、なんとせう彼と。せうと。ひとりひねのみ。金之助の婢女のお竹と。いづかたへ行て遊びるたるが先よ白翁が立歸るとき。すれ違て歸り來し。子ども心にも小三や乳母が。あにやら歎くやうにゆる。寝美さへもねぐらせずして。又門口に立出て。土はせり

して居る折柄。金五郎が来るを見て。よろこびて内。金之助「おつかアちゃん。おとつちやんがた出さよ。おつかアちゃんくト。出さりのいつ。金五郎の入り来るゆる。小三の顔を翹めつ。起あがりて右の手にて。ひなささをさつ。小三「お出まさいました。バウリ。差俯ひいてとをなし。金五郎「どうしたおかしな顔つさごの氣色でも悪いのうト。いつよかやさしき詞に。小三「いと胸先の。裂る許りよさしこむ瘡を。おさへても猶治らぬ。心一ツに白翁が。云たる事をいかよせん。なま中な事いひ出さバ。頼まれしかひもあし又金五郎も胸

の中を悟られじとわざとな 小三「けふ髪を洗ひましうら。
 まとふ頭痛が強くして。塞でならぬに色々な事を。考へまは
 ど心細くて。ろきでつい顔色もト せつなさかくし 金之助の
 さし窺きて「おつのアちゃんもう氣色癒つたかへト いわれ
 だをゆるり 小三「アイもういよよ 金五郎「ろんなに氣色が
 どおとし 悪さうなら。髪を洗なけりやアいゝに 金之助「れとつちやん
 今ね。他所のねぢいちやん来て坊こりつたよ 金五郎「ナニ
 おぢいさんが来たそりやとこのおぢいさん」と 三のはつと
 つか胸轟くをそらさぬ顔で 小三「ナニサなんのでござります
 り

外 色 者

よ。矢研堀の御隠居さんが御出なすつたのでござります。
 この子に見ると恐くつて。どふもなりませんナホ、ハト
 わらひよ。心の中。よこそつらくも悲しうるべし 金之助「おと
 まぎらす ouchやんお土産あるかへ 金五郎「ホイしまつた。ツイ今日の
 忘れて来た。その代りバト行て。何ぞいゝものをとつて
 來な 金の助「アイチャワバ、ア行ふやうト せよげるゆへ
 る乳母も うバ「サアお坊さん参りませうト 次の間より立出
 奇みだ顔 をつくく見 金「なんだてんくにおうしな顔をして。
 てふしんがや ぶふもおれあやア合點が行ねへ。なんぞ苦勞な事でも出來

暗云ニ
死後
之事

苦勞をさせるせつなさをうらさ 夫故ふこと祖父さんや両親へ。いち倍氣兼をするといふも。ア、うるせへ世の中だのふ 小三「其様にママお雪さんの事を。とや角とおつしやるがお雪さん。大事のくお家のお娘でござりますから。可愛がつてあげて下さりまし。どうで私の日蔭の身もある。どうなつてもよろしうござりますから。そんなにあちこちお氣をつかつて。必を煩ふてくござりませぬ。それが私の苦勞でくなりませんとしべし 泪は暮六ツの鐘の。鳴までまどろまん。と。金五郎は爰にうち臥ける。是より小三金五郎にありそつ

うしをいふや否やその次回を見て
知りたまふべし

第七回

生者必滅會者定離の。浮世の習ひと悟つたる。事も今の身の上。思ひ當りし愛事と。小三の胸にこたへたる。人に知れぬ苦勞も。兼ての覺悟と云ながら。さすの女のやるせましく。浮氣を捨て眞實に。二世と三世と契りたる。變ぬ中の金五郎の爲とは云ど今更。義理といふ字に責られて。縁を切らん。中々に身を。裂るゝより苦くて。とやせん角と案じれば。案じるはせ猶物思ひ。益る苦勞を胸の中に。置所へ泣の種

心を鬼に持とても。道に欠たる愛想づうしい。云よいれぬ
 思愛と。執着の糾絶がたく。ふつく思惱しが。左にも右
 よも末懸て。添れぬ仇な縁。ゆるなまじいなど云出して。
 臨終に悪しみ受んに。女子の罪の深き身に。罪重りていつ
 の世に。罪滅さん様いなし。薄き縁し。前の世の。因果と思
 ひ定めなべ。人を怨み身を怨む。よしなき罪の無ものをと。
 無為き世を悟れども。心細さのいとしく。生前のある子を
 捨ていとしい男のためあがら。暗冥土へ旅立ん。よくよ
 く業の深き身と。又くり回す迷ひの間に。獨り胸のみ苦しめ

爲三君
 一宵
 思誤
 妾百
 年身

つ。年頃日頃の辛勞が。積々てこの頃へ浮立ぬ氣の結れて。
 食事も日々に細るものから。面も形も枯瘦て。うつらくと
 氣を病むも。理りせめて哀れなり。かゝりし程に金五郎の案
 じると大方ならず。薬と醫者よと様々に心を配り氣を付て
 いふなり優くさるゝあつけ。小三といとゞその情の厚さと
 思の深うるを。思つ、け考めれば。何に義理でも探でも。い
 とし可愛の妻と子を。捨て死す可さやうもみく。寧その事に
 白翁が縁切てくれと頼る。事を打明金五郎ふ。話で談合し
 たならば。どらう。かうかと様々ふ。心も亂れ氣を揉て病ひ

の益々重る故。寐ても起ても物不せるのみ。頭痛とゆるぐ齒の痛に胸の安まる暇なまら。金五郎の勤の身ながら。案じるとひとかたならず。日毎く訪ひ来るが。今日しも例のごとく入り来りて。奥へどはれバ小三のそばに金の助のもよねんもな 金五郎「どうぞ小三けういちつとも快方りのトどいれて小三のくるしき中にも金五郎のかほ 小三「ハイ矢を見るよりちやめるの母ににっこことわらひ 張けうも全じ事で。どうも閉でなりません 金五郎「どうか。眞にどうも困つた者だ。薬の毎日精出してのむか。バ、ア立付て吞してくんなよト ちしろをむけばうばの火「ハイある

ツたろ精出してれ吞せやて早くお心よくしてあげたいと存じ升が。今度のお醫者のお薬の具あがり悪いさうで。ねつからどうもいの取ません 金五郎「そりやア悪いのう。どうで薬の吞にくいから誰しも進で吞ものねへが。そんなお無精じやアどうもいかねへ。それよわの醫者に懸てから。ねつから墓々しくねへやうだから。なんなら醫者を取替るがよろう 小三「ナニあのお醫者様もお功者だから轉ますにも及びますまら。どうでかういら病氣といふもの。いらくし事ならとア升から。れ氣をもんで下さいますな

私わたくししが此この病わづらひひより郎ちかに御ご苦く難なん悪あますとかと思おもひまひしま
すどもうく。いつそまの儘まま死しにました方ほうが遙とほましでおお
いませうといひつゝ、あまごご 金五郎かねごろう「又またそんな馬鹿ばかなとをい
ふヨ。なほ死しのびましなものの病やまひの氣きうら起おこると云いうら
氣きの持もちやうで早はやくも直ちかり重おもくもなるのよ。ためへの様ように些ちよつ
と煩わづらふと死しぬ方ほうがましだ。くくと氣きで氣きを病やむ者ものごから。
一寸いちじゆんとした病びやう氣きも堪たげの明あねへのだ 小三こさん「それでもどうも心こころ
がら氣きで氣きを病やむ氣きのございせんが。元もとより苦く勞らう症しやうな生うま
れ付つもへ。つまらさいことも氣きに爲なつて。あんまり深ふかく考かんが

已いニ決けつ
死しヲ以もつテ
是こゝろノ語ご

へますから 金五郎かねごろう「それか悪いよ寐ねる目めもねずに考かんへて。氣き
で氣きをもんで苦く勞らうをしてみ。儘ままにならねへ事ことが儘ままになるも
ののナ。余よ計けいな苦く勞らうで命いのちを削くるやうなもんだ勿も論ろん平へい生せいおれ
の爲ためを思おもつて。人ひとの知しらねへ苦く勞らうをしてくれるのは。深しん實じつ嬉うれ
しいの山やま々々だが。こんなよ病わづららつてくれちやア。實じつにどうも
困こまりさうせ。是こゝろのらひ考かんへ事ことの更さらりと止やめて。苦く勞らうは地ぢ獄ごくへで
も捨すててまますとさ、 小三こさん「あなたとさういふ口くちにおつしや
います。迎むかへ女おんなが罪つみが深ふかいから。苦く勞らうは一生しやう放はなれさせん苦く
勞らうより此こゝろ躰ただが。先まへ地ぢ獄ごくへまゐりさせう。あそれなとを
いひ出すおど

讀者、
腸為斷

伸擧りて小三の顔をのつくくと見てひざよふ金の介「おつ
 ちやんなに泣いたエ。おどつちやんお呵りか。坊あやまる
 かり堪忍ちておくるよウトをしのびておさむせぶ金の介を
 だき可愛さ餘てせつおさひ。胸も張裂ばかりある。金五郎も
 上て可愛さ餘てせつおさひ。胸も張裂ばかりある。金五郎も
 男心よ口にい様々いひさざらせど。小三のむねを押計り
 せまさ女の心から。よしなき苦勞に取つめて。もしものとも
 あらんかと思ひ過して胸せゆれど覺られじとてはな紙に
 泪包むぞ無理あらず乳母のね乳も傍らに二人が心を推量
 して共に涙は咽びける 小三のやうく「この子のまだぐ
 なみだをぬぐひ

わんせもなく。わさしが愚痴な心から。つまらぬ事を案じ立
 して。わんまり悲しくなつた故。つい涙を覆したのを旦那。
 に叱られるとかと思ひ。あやまる心のしほらしさ。なせ子供
 といふ者は。こんなにもママ可愛からう。この子の成人する
 につけ。慾に限らない故に。つ迄も達者で居る氣でも。壽
 命がなければ夫も叶はずもしあすが日に目を寐むつたら。
 さぞママ跡で泣だらうと。夫が今から見らるゝ様で。死ぬ氣
 の更なないけれど。逆も長命のできないわたくし。遺言で
 ござりませんが。ひよつとママ逆さまなど。この儘死よ

哀情 切々 不堪 讀

も致いたしましたら。便たより少すくない此この子の身みの上うへ。他人たにんの手てに懸かけな
いやらに。さうぞ向島むかしまの姉あねさんの所ところへ。お寄頼あつせなすつて下くださ
いまし。逆とこも日蔭ひかげで育そだつた此この子こ。未始終郎すゑしじゆうのお家督かとくを繼つぎます
ともなりますまいから。養子やうしにやらねばならぬ生先おひさま。今いまから
あんまり他人たにんの中なかで。いぢめられたり苦勞くろうをさせたら。根ねが
ひ弱よそい生れゆる。虫持むしもちよでも成なりませうから。外ほかへやつてくだ
さいますな。御如才ごぢよらもござりますまいが。六ツか七ツにもな
りましたら。手習てならひや讀物よみものも。教をへてやつて下くださいませ。又また
二ツにふたつにお雪ゆきさんと。御夫婦ごふうふ中なかよくお暮くらしなすつて。御祖おぢい父ちち

さん初め御両親ごぢやうしんへも。御苦勞ごくろうを掛かけやさぬやうに。御孝行ごかうぎやうよな
すつてくださいませれば。私わたくしはモウぞのやうな。佛事ぶつじ供養くやう
をしてくださるより。思おもひ残のこす事こともあく。淨うかみます郎あなにこ子こ
供どもの時ときのらお昵なびみやして。ひとふたならき御恩ごおんを受うけました
が此世このよの縁えんが薄うすいりして。この子このでござるも末すゑ懸かけて。添そふに
添それぬ身みの因果いんぐわ。何なんの報かへひで此このやうに。後生ごしやうの悪わるひ生うれか
幾度いくたひ思おもひ歸かへしても。返かへらぬとでござりますか。是これもやつぱり
女をんなの愚痴ぐち此上このうへの。お情なさけに。わづきの躰からだとあまたのお寺てらへ。
どうぞやつてくたさいませしとふしたならあの世よへ行いつておそ

不_レ能_下 把_三滿 肚_ヲ丹 誠_ニ示_中 金_上五 遺_レ憾 々々

バは居れませうのと。のりあいやうでござりますが。今の身
にての夫が樂_{たのし}み。お察_{まづ}しなすつてくだらいました。 又もな
もろどもよくくりへ 金五郎「又そんなつまらぬへと云よ
してぞあげさける
あんまり鬱々_{くよくよ}思ふから。ちつと取の不せたのじやアねへの
ノ。この一日二日となんでもおれの顔さへ見ると。哀れつば
い事はつくり云_{うた}のら。ねれまでどうか。氣色が悪くなるやう
で。愚痴_{ぐち}を考へ立して氣でも狂ふといりねへのらほん
に氣を確_{しつ}かりもつがいせ。お雪にひどく氣がぬをするう
ら。それでこんな病氣_{びやうま}が起るのぶらう。あの子_こお雪と祝言_{しうげん}し

たのい知てる通り祖父さんや親父の氣安めの爲_{ため}だらう。
何も今更_{いまさら}おめへを捨_{すて}る心もなし又金坊_{かねぼう}ができたうら。榮耀_{えいよう}
榮花_{えいけ}こそさせられぬへが。そんなに不自由_{ふじゆう}もさせめへし。日
かげ者_{もの}でもなんでも。共_{とも}心_{こころ}さへ變_{かわ}らぬへけりやアい、ど
やアねへの儘_{まま}になぬのう浮世_{うきよ}ごとく唄_{うた}よこへ歌_{うた}ふくら。
其處_{そこ}を承知_{しやうち}してなにも時節_{じせつ}だと。氣を大_{おほ}きく持_{もつ}て往_{わう}生_{じやう}して
みなけりやア。苦_くの世界_{せかい}が渡_{わた}れるものかな。やんよ往_{わう}生_{じやう}する
といつちやア氣掛_{きか}りづつら。ア、鶴龜_{つるかめ}くと 小三_{せうざう}のこゝろ
とバのいしあもいまのしきとのみいひて氣_きを 此_{こゝ}日_ひの金五郎_{かねごろう}も
にうけるもむしのしらせるゆゑなるべし

何となく。小三の身が案じられて。歸る心もあかりしかば。
 看病がてらまゝに泊りて。夜もすがらしめりごちあることの
 話して。夜更て皆々打臥ける。明るあした金五郎の。早く
 起出仕への身なれば。立歸らんと身じ度するよ。小三の心の
 疲にや。未目覺さぬ此方への。金之助がのさあきまてうを
 ぶりてあや。金五郎「バ、アや子供といふ者の誠は朝起な者
 しながら。ごのう。坊やのしやべる聲でおらア目を覺したやつよ。うん」
 さやうでござりますますのよ。さう致てもお坊さんへ。お晝寐を
 なさいますから。朝がお早うござりますますのよ。やんぬお母さん

金五亦
 甚般勤
 小三以
 死不
 憾有
 以

んいまぐれた目覺がござりません子。旦那さんエ。あなこのさ
 をモウ御苦勞でござりませうが眞に。お困なすつたことで
 ござります子エ。金「そうよ。實は苦勞でならぬへ。それになん
 どの氣に掛ると計りいふから。さうも案じられて安心まら
 ぬへよ。おれの勤めの身のとゆるる。毎日附をやしお付ても居
 られず。あんでめてめへ獨で頼だから。随分氣を付けてやつて
 くんな。女と云もの心の狭ものごから。ひよんかきとでもし
 めへかど。それが一倍心配だ。いひながら金之助の。こりや
 金坊や。おつのアのきらくがわりぬからの。あんまり世話

をやかせずおとなしに大人おとなくして居ゐのごヨ。又またあして明日あした來き時ときふ。お土産ひんぎ
 をたんと買かうて來きてやりませうトいへばうれしそ。金のごお
 とつちやん。坊大人ぼつおとなちくするのら甘いものお呉くよ。明日あしたおつ
 ちやんさいく。未まだ悪わるいりや。坊大人おとなちくす也やヨ。金五郎きんごろう「チ
 ーさうづく。坊ぼの利口者りこうものだから大人おとなしくするのふ。うんな
 らおとつさんのママ歸かへりませう。おつかアハ未まだ目めを覺ささね
 べから靜しずかにしなよト小三こさん「おさいで。小三こさん「チヤモウ郎あまた
 お歸かへりなさいまはのエ。今日こんにちの御番ごばんで有あり升まかエ。金五郎きんごろう「フウ
 〇モウ四よッだから歸かへらざアなるめへなんぞ用もちでも有あるの。小



三「ちやうさねへ用と申すのでもございませんが。なんどり今朝と御歸し申すのがトなどりおしげ金「又そんなことを云て留るのかけふは。顔ツつさもでへ好やうだせ。なんにしても歸つて又出直して来やう。主人へ勤の間を欠ぬも。親父や祖父さんへの心安めど。マアなんでも精出して薬を呑がいせ。小二「それでも郎今夜はお出なさりやアしますまい子金「大財から繰合して来る氣どが。あんまり遅ければ明日の朝と是非来る。それ共用でも有さうさうして置ね入。小二「はんに夫々。金坊の脊中の炎が曲つておりましたから。

紙情期後之托縷
上綴此日助ニ金々

どうぞ直してやつて下さいまし。そしてまだ疱瘡前でございますから観音様の二王さまの股をくりらせて下さいましヨ。此頃はあつちこつちにだいぶ疱瘡がのりますとらだから夫にアノモウ獨り行を教してあぶなくつてなりませんから轉ばすの玉子守と。水天と標のお守りを掛させてやつてくゞさいまし愛らは近所お川が多くございますり水が怕つてなりませんト。ばんじにつけて子をわんじる金五郎「なんだな。うんち事は何時でも云れるものを。わんまり種々あつと云うらごも歸るのがおかしやうだマアモウー

服香ぶくせんでから歸かへる事こととせうト 思おも心こころにも氣きにかゝれバわかれの
 こをすひ付つて 小三せうさん「袖引煙草そでひきタバコで郎あなのお足あしを。無理むりお止とどめ歌うた
 出いしあから 妓めの時とき分ぶんり。眞まことの苦く勞らうも苦くみあらず早はやく身み儘ままになりい
 樂たのしみ盡つきて悲かなしい今いまの身み。思おもへば夢ゆめのやうでございませぬへ 金
 五郎ごろう「さうよ世よ子このでさねへ時とき分ぶん々々。やんの色いろ事こと後あと生なま樂らくむり
 赤あか口くち舌げにすねたり妬やいたり。つらむと思おもふは逢あはねへ晚ばん夕ゆうの
 恨うらみ今こん夜やの手てくた。面おも白しろい事ことも樂たのしみも考かんがへて見みると昔むかしのや
 うだ爹ちやうい。じみた三さん草くさぶがア、年としは赤あかんでも重おもらねへ事こと
 〇あの時とき分ぶんのやうな身みの上うへに。もう一ひと度どなつて見みてへ者ものぶト

以以ニテ小
 見見ノ口
 點點ニ此
 一一句句
 哀哀々
 切切々
 之之情

じゆつくわいさめたるくりとにふさぐこい 金かねの「おつかち
 ろを子このしらで金かね之の助すけのあそびにあきけん
 やん坊やんぱく。ば、アと遊あそぶのモウいやくだよ。なんぢよ味あじいも
 のお呉くれよう小三せうさん「アイく。モウお遊あそびのいやくかエ。そ
 んならば、アや。お菓くわし子しでもやつてお呉くれヨうむ 「ハイく。
 お坊やんぱくさんサア落お雁かりを上あませう子こエ 金かねの「乳母坊にゅうぼ。落お雁かりいやい
 やだよ。梨なし子し食たべたいよ。お母つかちやん。の、ちやんの梨なし子しれく
 〇〇〇小三せうさん「ナニ佛ぶつさんの梨なし子しかエ。坊やんぱくの此この間まね齒はが痛いた々々だ
 つたから。信州しんしゅうの戸の隠ひさんよお願ねがひ申ましたから。梨なし子しの給たら
 れないから菓くわし子しにねしよ。い、子こだ子こエ坊やんぱくの 金かねれ「ね菓くわし子し

勝金 五小 三百 萬言 悲哀 言一

いやくだもの。佛ちゃんよ上がちて居る。梨子たゝゑよう
 トぞゑよなる 金五郎 「坊やなせそんなにだゝをいふ。梨子
 の毒だから悪いく。だゝを言ていびるから。おつかアの氣
 色が悪くなるのだ。大人くしてお菓子を食べな。赤い甘いれが
 あるから。コレ坊や。なせそんなよ似指をいぢるのだ。似指
 をいぢると手へ灸据るよ 金の助 「灸いやく御免ごよウれ
 とつちやん似指いぢやないかヤ。なんじよ買ておくゑよう
 金五郎 「チゝさう大人くするなら味いものを買てやりませ
 う。ねとごさんのお屋敷へ歸から。ね竹に抱子して。兩國

斷腸

のお橋の方へ一處に來な。お菓子とお手遊とを何を買
 てやろうのう 金之助 「アノウお菓子と手遊と。そイカヤアノ
 ノウ佛ちゃん上る花々買てお呉ようト いわれて小三のむね
 氣より 金五郎 「エ、此坊の妙な子ごのう。なんぞと云ど
 佛さんへ買て上様くと云か。氣に成とをいふ坊主ごど。マ
 ア何でも好から一處に來い。そんなら小三大事にしあ。
 バア氣を付てくんなよト 金の助のお竹よいだかれさきへ
 おもてへ出てゐる小三ハ金五郎のうし 小三 「左様なら涉機
 ろよりきものゑるりをなほしなから
 嫌ようチヤあまた一寸こちらを向て涉見せあはしませ

まごひもわかれをわしめ 金「ナせ己が何ぞしたか 小三
 金五郎のふりのへりて 小三
 ハイお頭上に何やら芥うと 小三
 へば心も消々に。とつと見詰る目よ涙の堰くる胸のせつなさを。咳に紛らす顔に袖。あて、泣目を隠すなる。心の中の四
 苦入苦。思ひやるさへ慄れなり 金之助のわ おとつやん早く
 くお出よう。がら負脊居て待居るヨト せたげられて金五郎
 うし 戸を跨ぐつみよ門口の石に蹴つさよる 金五郎「ホイ。こ
 いつア仕舞た小三「チャヤとうなさいましたエ 金五郎「ナニ鼻
 緒を踏切たヨ。ハア面妖な。昨日買った雪踏だらう切れる筈

のねへけれど。どうもふまきぎじやねへのうらト 又氣にかけ
 小三「そんならアノ昨日お買なすつたお雪踏の鼻緒が。
 アノ切ましたかエ。金「フサこらいつアどうも氣掛りた小三「エ
 〇トむねよこたへ。あのそんならお雪踏をお竹に持せて。直
 しの所へおやんなさいましな 金「あア一本鼻緒が一本切
 たのぶから。履て行て橋臺で直させやう。サア金ばら一處あ
 來なト 心ならせも 小三の金五郎の後ろ蔭。見ゆる迄見送て。
 名残りの泪のやるせなく。留め兼しを斯ての果じと。思ひ返
 して食事をを。やうくよ給しまひ やうじをつくりながら
 さのぬけしとくかんの

へて居たりしが 小三「ど、アヤ。けふの旦那も色々御用が
 うばにむりひ
 あるそふぶぐら。モウ出直してお出さうりもしまひし。私し
 も氣分が大きによいから。保養がてら今ツうら。向ふ島へ行
 ふと思ふよ夫にこの節のモウ。花屋敷の七草も盛ぐらうし
 天氣の好。金坊を連れてぶらくと出掛やうよ。夫のよ
 ろしうござんます。おめんばいの悪いのよ。とは道をお歩
 きなすつたら。又後がおわるうござんませうヨ 小三「ナニ愛
 からのそんきに遠くもあいな者をおぶらくと出掛らう。氣が
 晴て却つてよかるうヨ。向島の姉さんも。金坊が成人しこの

暗々 訣別 而人 不_レ知_ニ 其訣 別_テ知_レ 之者 小三 人耳故 其悲 集一

を見タダつて。連れて來くとお文を度々およこしだりら。マ
 ア何にしても出掛ようヨト 是より小三の身しよくして。乳母
 よ金之助をいぶはせて。向島へと出行ける小三の。姉眞名鶴
 の。富家の隠居に愛せられて。向島の洲崎村ある。秋葉の社
 の邊り近くの。別荘に住居まて。雪月花を友として。最樂々
 と暮し居けるが。此春隠居の世を去りて。亡人の數に入りし
 かべ。本家の主人も眞名鶴の便りあき身を憫れみ思ひ。殊に
 壯年のとなれば何方へありとも。支度して。嫁入らせやらん
 と深切あ。情厚くいひけれども眞名鶴の。今さら縁着て榮耀

を望のぞむ心こころもなく勤つとめの身みにて年とし久ひさしく。つらひ苦く勞らうもし倦ある
 れを。縦たとへ令よ不ふ自由じゆうの暮くらしをするとも。世よを物もの靜しやうやかに送たくらんて
 と。上うへもあき樂たのしみなれを。哀あはれ尼あまとなり佛ぶつ門もんに入りて。隠いん
 居きよを初はじめ亡なき親おやの。後のちの世よをも吊とむらわんと。生しやう涯がの願ねがひありと
 て。只ひたす管たすに望のぞみけるゆる。本ほん家けの主あちもその心こころ探たづねの。清あやらかな
 るを深ふかく感かんじて。望のぞむに任まかせて。別べつ莊そうを眞ま名な鶴つるに譲ゆづり。其その庭にえ
 の中うちに庵いほを造つくらせ。念ねん佛ぶつ庵あんとふ號なを付つけて。佛ぶつ事じを營いむ補たす助け
 とし。日ひ々の雜ぞつ費ひの月つき毎ごと送おくり。不ふ自じ由ゆうなく暮くらさせなれば。
 眞ま名な鶴つるの日ひ頃ころの望のぞみも叶かひ其その恩おん義ぎの厚あつさを喜よろこび。浮うき世よを逃のが

れし心こころ地ちにて。髪かみを切きり尼あまとなり。名なを紫し雲うんと改あらため。月つき々々に
 彼かの庵いほにて。百ひやう萬まん遍べんを營いみ。佛ほとけに仕つかゆるを身みの業わざとし。行まひ
 澄すまして暮くらし。最いとく々々殊しゆ勝しやうの事な爲なけり。頃ころしも秋あきの中なかなれば
 庭ふら面せに結むす梗けい女によ郎らう花ななでし子こ蘭らんあど。様さま々々秋あき草くさの咲さ満みちる
 儘ま。紫むら雲うんの御み佛ほとけへ參まゐらせんと。庭にえ下げ駄たを穿なり立たちて。花はなを手て
 折をりておる折をりから杖しやう折をり戸との外そとより人ひと音ねする故ゆゑふりかへりてひ紫
 「チヤ〜青あお柳やなぎ橋はしの姉あねさんだ子こ。よくマアお出いでだねへ。サア
 く此こつ方ちへお上ありナ。ヤレ〜よくね出いでだト。さすのしんみ
 の喜よろこぶと大おほかゝならず。小こ三さんも姉あねの無む事じな顔かほを見て。嬉うれし

の限りなく。乳母の背中に負れるる。金之助を抱だおろし。
 手を引て座敷へ通り。おさだまりのあいなつすみて。紫「ヤレ
 く誠み久しぶりだ子。チヤ御無用よおしならよいよ。遠方
 なのよお土産まで。ほんよ此間人をあげた時。お前が一寸氣
 色かわるんよ。お返事に書ておよこしだから。どういふ様子
 かといつそモウ案じ暮して。一寸と見舞に参ろうと思つて
 居が生憎私しも時候に當つて。終々けふ迄出兼て居よ。未お
 前も顔の色もわるいガ。氣分ハ段々好方かエ。ろして舟で
 もお出のウエ。小三「イ、エ歩いて参りましたよ。見掛程心持

ハ悪くもございませんが。只閉ぢ計りでござらますのよ。ま
 たくしハモウ手まへにうまて。御無沙汰計り致しませ
 から。あなたのおあんばいのたわるかつたのを。存じません
 でお尋ねすも致しません。紫「ナニサ私のハ母んの當分の事。
 モウさつぱりと快よいヨ。ほんに金坊よくお出づ子。少と見
 あい中に大きくお成だぞ。目付や口元がお父さんに生だね
 へ小三「金坊や。手をついて。おばさんに。ハイ御機嫌ようど
 お辭義をしきよ。紫「アイくよくお辭義がでますぞ利口
 者ぞぞ。サアくおばさんに抱子をおし甘いものを御馳走

するから。ま、よくいふとをお聞きぐぞ可愛かわい、ねへト 金之助金の助を
 ひざのうへにいらぬと紫紫「乳母乳母アお出いでかエ。ハイ暫しばくお達者たつしや
 でよい子うぶ「ハイ有難ありがたふござります。まことに御無沙汰ごぶさたさま
 を致します。へへ、マヤお坊ぼうさんお嬉うれうござりまするエ。
 お抱子だっこでよふござりまする子こエ 紫紫「此子このこもお前まへの丹精たんせいで。真まことに
 大人おとなしく成人せいじんした子こエ。やん、氏うぢより育そだてがらとやら。此未このまへ
 ともどうぞ面倒見めんどうみてやつておくれ うぶ「イエモウれ利口りこうな
 お生れ付うまでござりまする。目めからお口くちへ抜ぬけますやうで。池い
 の子供衆こどもどもより御合點ごがてんがよく参まゐりまする。紫紫「やんにそふご

ろう子こエ。金坊きんぼうや。おとつさんおとつさんの御機ごきげんよいかエ 金「アイ
 おとつちやんお屋敷やしきよ。お竹内たけうちに居ゐるヨ 紫「まとお竹内たけうち内うちよ
 おるす番ばんでおとつさんはれ屋やしきりエ。よく分わかねへ。お常つねヤ
 お煮花にせやを早はやく拵こしらへてツシテ。今いまふらつたものを取とりにやつ
 てお呉くれりエ 下女こしも「ハイ、只今ただいまお煮花にせやもでますヨ。アノれ
 菓子かしも三松さんまつどんが取とつて参まじましよ 紫「そんなら早はやく爰こゝへ以い
 て來きて金坊きんぼうに上あげて呉くれしての鯛たひしち七しちへろふいつてやつて金
 坊ぼうやおつちさんのお好こな甘あまい魚さかなを取とつておくれヨ 下女こしも「ハイ
 く畏かしこまりましたトよバナと菓子かし 小三こさん「マヤモウたうまい

對話
之場
寫得
妙

なさいますと。今日、御馳走を頂戴しますより。久しぶりで
 もつくりと昔し咄や。うさばなしで。氣を晴すのが何より御
 馳走。紫「ほんにさうさねへ。女といふもの、久しぶりで逢て
 も。身の上話しがあんどより。外に話してもあつものさ。マア
 お茶ができたのらお菓子をお上り。サア金坊好なりこんど
 お上りヨ小三「ハイありがたふ。さやうなら坊や頂戴さ。チ
 ヤくれ珍らしい牡丹餅をございますかエ 紫「アイ富貴
 牡丹といふ道明寺のおりぎサ。そちらよめるの、都鳥とい
 ふお菓子で。両方ながら向島の名物だから食て御覽小三「は

んに左様でございますかエ。サア坊頂戴てれたべ。ハイアに
 もは相伴させませう金「れつうちやん牡丹餅おいちいヨ。坊
 さんと食もヨ小三「ほんよ誠にお甘びございますチエ。乳母と
 んごよい御菓子ごのう うづ「さやうでございます此やうさ
 御菓子を向島で賣ますのをさつをり存じませんチエ 小三「
 そふさモシ御姉さんエ。是の御近所で初めましうチエ 紫「ア
 イ直此秋葉様の裏門の通りで。土手へ出る道サ。松花園と
 んふ内で。近頃賣初めたが飛ぶよくするチエ 小三「さやうで
 ござります。實に美味でござんませから。坊の大悦びでたんど

頂うたまります紫むら「うれいよかつたねへ金坊たんとおん入いりヨ。乳母にゅうぼの酒いさけの方ほうだから今いまにた肴たかひが来ると一ひとト口上くちあがりるヨ うう「イエ御酒ごしゆの方ほう又此またれはぎと都鳥みやこどりの結構けいこうでございます。そして手て奇麗きれいでございますうら。おつうい物ものやお土産みやげなどには。よろしうございますすすす。これハ今いまに流行しやうりやう出だしませう紫むら「さうサわさしの處ところの本店ほんだんなどでも。人ひとを使つかはさる度たんど毎まいよ。い句いごでも買かて来こいとおつしやるそうさ。さここでも評判ひやうばんがよいうら流行しやうりやうて来くるのサ小三せうざう「ほんに向嶋むかしまも今いまじやア都みやこになりましたチエ紫むら「この節ふしのおまへ。梅屋敷うめやしきの七種しちしゆの盛りもりだから。たいそ

作者、
用意、
可云、
密

う見物けんぶつの人ひとが出るヨ。それに蓮華寺れんげじの大師様だいしのお庭にわがよく出で来たから。段々だんぜんこつちも賑にぎやかに為なるチ小三せうざう「さやうでございますチエ。私わたくししも些ちつと休みやすましうら。坊ぼくを連つれて梅屋敷うめやしきの七草しちそうから蓮華寺れんげじの大師様だいしへお参り申まませう。今年ことしの旦那だんなも前まへ厄やくでございますうら。お身みの上うへに何事なにごともないやうに。金坊きんぼくの行末ぎやうまつや私わたくしくしの後のちの世よの助すけりるやうによく祈いのつて参まりませうトはろりなみぶをこがすにぞ紫むら「やんにおまへも私わたくししに似にて。後生願ごしやうねがひごと見みるるねへ。金坊きんぼくの退窟たいくつだるうから。三さん松まつと一處いつしょにね庭にわの池いけの緋鯉ひいこひにお菓子くわしでもやつてお遊あそびトい

れて金之助はいそくよろこびうてつち
ばに手をひかれにいまわたりたち 調市の三松を相手にして
池の邊を廻りぬるも。緋鯉龜の子など追回し余念もあらず
遊びぬる

第八回

その時紫雲の長羅宇の。烟管に多葉粉を吸付て。小三に出せ
ちが小三「ほんにお羨ましい貴姉のお身。うるさい世事
の御苦勞もなく。朝夕こんな静な所ろに。愛世を捨ての樂あ
お暮し。私しもどうぞ三日なりとも。佛に仕へて死にたいと
心に願つて居ますが。身の罪障が深いかして。夫さへ叶わ

善知識

ぬ憂苦勞。なんの因果でござりませうト しじらなみづくにむ
ふどなくむ紫「なんの私の身の上。羨山しいといお前の
ねせまり 僻言。世え在てこそ人は花。金坊といふ身を結んで。苦勞の
有うが又樂み。旦那も人よれ勝れなすつと。發明きお方ゆへ
行末のそれこそ安樂だの子。面白い事もあつた事。樂み
も悲しみも知ぬこの世の世捨人が。なんの本意であるもの
か子。是も定まる因縁と思つてゐてころ又安樂。姉妹二人が
同じやうに。浮世を捨てと亡親づちの。菩提のためと思これ
やうが。却つてそれで不幸の罪。せめてお前は人並に。世

を過てころ両親が。草葉の影からお嬉び。必ずしもたしが
 身を。羨まないうで金坊や。旦那を朝暮大切に。憂苦勞をも辛
 ぢうして末の榮へを樂しむに。時節を待のお樂の種。少しの
 とをさなく思つて。あんまり苦勞計りおしごと。大いづ
 らひにでもなるふもしれぞ。氣を切かへてわしよも。苦勞
 をさせておくれでないとしんみのとを身おしみてう。涙を袖
 に包み兼袂を濕し姑らくい。詞さへ辻計り也紫雲の是を案
 じわび倚や金五郎が小三を見限り。お雪に心を移せしゆえ。
 胸を苦しめ氣を使ひてこそ病らひの出しうとおもひすぞし
 てひさまりよ

小三 苦心 可想

せ紫「おまへの閉ぐを見るま付。病ひの根がしれないから。
 どうもわたしの案じられるよ。瘵や血の道でふさぐのなら
 案じるほどの事もないが。何やらひどく氣をいため。心の勞
 れのむづらひかと。見ごと曲目かしらあいが。思案に落ちい
 事でもあつて。一人で心勞してゐると。ろくなとは考へ付す
 〇苦勞にく勞を増やうなつまらなことを考へ出すから。段々
 病氣の重るとも。快氣方の少ないものさ。他人は格別眞身の
 わたし。世を捨し身とひきぎら。苦勞などがあるあらばれ
 まへの胸を隠さずに話して聞せておくれなら。女の智惠の

淺はかでもその膝とも談合づく。隔てぬでこそ實の姉妹。
 鳥啼が惡いにつけ。夢見のゐるや何かにつけ。お前の事が氣
 に掛り。後生と願ふ妨げど。思へば凡夫の悲しきに浮世を捨
 てもやつぱり苦勞。心の安まる暇の無いナト
 中になさげどなみ だをふくみたる 姉の意見のありがたさに。小三は始終涙
 にくれ。胸も張裂ばかりにて。顔もえ上るたりしごと。やう
 袖にあみぐ。小三「眞實眞身の妹と。お覺めしくださればこ
 そ。お樂になつての段々のおと。嬉しにつけ悲しに付。
 なんであなを隔てませう。この世に杖とも柱とも。力と思

物内見色
 有外其

ふいあなたれ獨り。浮世に人は澤山あれど。考へて見るとお
 まへさんやわくしほどの因果者。あんまり外にあり
 ますまい。生れ落ると親に離れ。姉妹二人揃いも揃つて。故
 郷を他へ遙々としらぬ東へ迷ひ來て。うき川竹の流れに
 沈み。苦勞も苦勞をし扱たあげくに。あなたが行末たよりの
 お人に早くお別れをすつたもへ。お若い身それに世を捨て。
 附會しらぬ佛の道。夫にひきかへ私くし。恩と情を捨兼し
 浮世の義理に責られて。日蔭に咲し仇花の。散て行身厭ね
 ぞ。まだ撫子も擧へにて。青て上ぬが一ツの氣掛り。紫「その

なでし子が氣掛、どのエトどかめられ小三「サア其氣が、
 りとの金坊が事。ど角虫持て病身ゆへ。明ても暮ても苦勞よ
 かりどうぞ丈夫お育てたいと。思ひましても子供の事。な
 んだ給たい彼がたべたいと夫のく日ごな一日。見るほど
 の物たべたがり。ねだりごととも三どよ一どい。食過ぬやうに
 氣を付て。たましすかせば頑せもなく。嫌として泣ますの
 トツイ可愛さに引されて灸で恐喝より早手廻しと。ねぐる
 お菓子とめてがひますと。又食過てはお腹が痛い。痛い
 の食傷の度毎よ。虫氣でいつも一寸との直らず。一躰ひ弱



い生れだのにわたくまの乳でそぐてぬから。猶病身になり
 ますると。思へば不便が彌増て他の丈夫の子供のやうに。折
 檻もせず強も呵らず。わんぱく育成が増長して。手に乗ぬ程
 の徒ら者になりましたせへかして。些づ、丈夫に育つやう
 だと思へば。旦那又行義がわるいの。育てがらゝ悪いから
 のと。あの子の身の爲を思つて。小言をおつしやるも無理で
 はないが。まだやうく九三年よ。なるかならぬの懐ろ育ち
 生れ落からちやはや云て。あんまり大事にし過たゆる。我ま
 へ氣儘に育つ等。今更急に折檻したり。泣時頭を打たりまて

緊しくしゝらわが儘も。少し宛の直りませうが。只でさへひ
 弱い子が。夫こそ驚風の虫でも引出し。そんなとうの病身にな
 りますぶろう。可愛い、に付不便お付。苦勞の安まる暇もな
 く。氣で氣を遣ひますゆへに。今の病氣も起ましの。是も
 わたくしが氣が少さいから。せせとよい苦勞を余斗に致て。
 壽命を縮ますも心柄。逆も長生のでさせんが。思へい具に
 世の中をさうるさい者いごつりません。それゆゑにこそわ
 なたの御身が。お羨やましうござります。ト
 なみぶながらの
 かこちと聞く
 ちるむねをなでおろしつ、紫「そんならふいへをそらで

もあろう。けれどもそれのはんの一隨。早い譬の世の中に。
 子寶と云へいふもれを。大切な金銭よりも。子程まよつた寶
 はないと。誰しも知る世の常言。子を持た身よ苦勞の絶ぬ
 おまへ計りでのあるまいし。皆な世間の習ひだの子。高貴
 でも下賤でも。子も引とる、親の常。マア見る影もな橋
 の上のむしろ蒲團に世を送る。食ふや食はずの乞食と云へ。
 子を大切に可あいがり寐る目をねまに育てあげても出世の
 出来ぬ乞食の乞食。上を見れば方圖があらうら。貧しいもの
 を思ひやれば寒い目もせず不自由なく。暮してゐるの安樂

姉元 不知 小三 决心 也然

さ子。欲に限のまゝ世の中へ十分な。とも不足に思ふ。
 人情づからし方もないが。ね前々も日蔭の身で。儘あな
 らぬを苦におしぐが。滿れば飲るといふ通り十分過たとい
 ない者人のほしがる金銀が。有り餘るほどの大家より。子を
 欲がるほど子が出来ず。會乏人の子澤山を。羨やむといふと
 づのら。金銀づくにも換られぬ。金坊と云ふアノ大事の子
 寶。良病身の生付で人のしらない苦勞をするも。親となり子
 となる程の。因縁づくごと断念て面倒を見て育ちつて。
 親の役目が濟ぬといふもの。サアこれづから少しの事を。

其言無之者
無三知
之者
作
弄
處
文

よく案^{あん}考^{こう}て煩^{わづ}々^{わづ}つての。お前^{まへ}の身^みにも壽命^{じゆみん}の毒^{どく}。彼子^{かいた}の爲^{ため}
にもあるまぬから。氣^きを引^ひ立^たて煩^{わづ}々^{わづ}やうふ。身^みを厭^{いと}ふのが
肝心^{かんじん}さ。世^よは樂^{たの}しみも何^{なん}にもあひ。わたしは身^みを羨^{うらや}ますと。
金坊^{きんぼう}の行末^{ゆくすか}を神佛^{かみほとけ}は祈^{いの}つて。成人^{せいじん}させるがお前^{まへ}の手柄^{てがら}。女の
道^{みち}の欠ぬといふ者^{もの}。しらし子持^{こもち}の身^みでありながら。旦那^{だんな}は爲^{ため}
の手助^{てすけ}けに。身過^{みすぎ}世過^{よそが}といふもの。人の機嫌^{きげん}氣^きつまを取^と
。今の身^みでの座敷^{ざしき}活業^{かつごう}のマ、とぞいやごううづらかるう。ど
わたしは昔^{むかし}の身^みを思^{おも}つてもたまへの心^{こころ}が悟^{さと}られて。もうも
う胸^{むね}も張裂^{ちやうりゃく}やう。何^{なん}うに付^つて苦^くが絶^たぬから。閉^ふいで病氣^{びやうき}の起^{おこ}

る筈^{はず}。どつといふ者^{もの}のわらしと違^{ちが}ひ。お前^{まへ}の身^み一つといふで
なし。幾度^{いくど}も煩^{わづ}々^{わづ}いふやうなれど。あんまり苦勞^{くろう}に苦勞^{くろう}を重^{おも}
ねて。今の煩^{わづ}々^{わづ}らひが大^た病^{びやう}にあると。若^{もし}もものがあてもしま
い。が。さういふ時^{とき}にりわらしの元^{もと}より。金坊^{きんぼう}も便^たりがなくなる
りら。どうぞこの末^{すえ}の願^{ぐわん}でもかけて。煩^{わづ}々^{わづ}やうにしておく
れ。さすがあねがけ理^りをわけていもとをわかれ。小二^{せうじ}「その
御^ご異^い見^{けん}に付^つまして申^{まを}すやうでございまは。人の命^{いのち}。今日^{けふ}
がけふ。翌^{あそ}日^びがあととて定^{さだ}まらぬ。世^よの習^なひゆへわしくしが
。けふが日^ひ若^わもの事^{こと}があらうも。知^しぬ生身^{なまみ}のとなれば。逆^{さか}さ

まさぐら御回向を。受升ともあろうも知れず。達者でおつても亡後でも。眞身のあなたお獨り。何彼につけて金坊が事を。どうぞお願ひやしますから。あるいとこの様も。お聞きなすつて下さいました。子にまよふゆゑひたすらに紫いなんぐエモウそんな哀れつばい事いつてお呉でない。姉となり妹と生れて来たからの力になつたりあられたりするの。そりやアいいないでもしれた事もうくそんな愚痴の止て。金坊と伴て梅屋敷へでも行て一寸氣晴しをしとて出。庭のあそびにあきたるよや。乳母に抱かれ座敷へ來れ

バ。紫雲の抱きつ愛しつして。まが子のおとくも可愛も。是より皆々諸共に。梅屋敷へ行んとは。内より下女と下男を。残して小三と紫雲の連立。花屋敷より蓮華寺の。大師へ詣に出行し。程無して立歸り。紫雲の種々の美味を。のへ皆々に夕餉を進むる。馳走の時を移しければ。秋の日のいや西に傾き。入相近くなりしかバ。小三の家に向へらんとき。小三ヤレ。今日と久しぶりで。終になく緩々。身の上話に鬱を晴し。まことに保養致しました。日の暮るおも氣が付ず。盡ぬ話しを繰返して。大きよ遅く爲ました。乳母お前も支度

止所^{ムレモ} 欲也歸^{スレモ} 所^{スレ} 也^{スレ} 小三^{スレ} 一身而

がよいなら。モウそろそろ帰ろうじやアないか紫「マアおまへよははす。夫よ今日の遅くもなるし。内にさしたる用がなくバ。又此云よい首尾のないから。今夜一ト晩泊つてね出な。病氣がよくなつて座敷へ出るやうよなると。又出るといふが手重にまつて。いつ來られるか知れまいかと寐物語りにゆつくりと。身の上話の跡を續でふさぐ。胸を晴してお出よ小三「わたくしも適々でいござりますし。盡ぬお名残だから何ぞして。泊つて参りたいと存じますが。今夜私しが留まの後へ。ひよつと旦那がお出なると悪ふござりますから。

情其^シ 可^シ 患

どうも歸らずとなり升まい紫「ほんにさうさねへ。旦那の御機嫌をそまねても悪し。一ト晩でも儘にならなにとだねへ。そんなら船でお返りな。しかし揺てくるうらうから駕籠の方が好らうか小三「ナニそきおも及びません。随分あるいて参られますのら紫「それでもお前氣色の悪いに往還でい疲ばれるヨ小三「しゝエ却て些しづゝ頭痛の致す時と。歩く方が勝手でござい升紫「さうり子。そんなら金坊計りも泊てお出ま。のう金坊。おまへの。乳母と爰へお泊りよトいづいづげればうれ金「アイ。坊。おバちゃん處へ。寝仕て。お池の龜しそふに

ン子こつやまいゆよトるなかめづらしき子こどろまかへるそ
 て小三こぞう「チヤそんな坊ぼやうの大人おとなくしてお泊とまヨ。バ、アのい
 ふとをよくまらして。だいをらつて曲まるでいなよ。アノ内うちに
 居ゐるやうに起おことの。おばさんが泊とまて下くださらないよ。あまゝが
 可愛かあいがつて下くださるうら。直すさに泊とまろうとヤシまして。臆おく面めんが
 なくつて困こまります。紫むら「それぐから眞まことに可愛かあいいのサ。人見知しり
 をする子供こどもは。愛相あいそをしても泣な出すうら。迂雁口うづやぐちも聞きけない
 が。此子このの様ような笑わら容ような。可愛かawaiiいらし子このあひません 小三こぞう
 坊ぼやうのまことに仕合しあせ者ものじよ。此この野廣のひろい處ところへ泊とまて頂たまらして。おつ

かアよりわやうり者ものどの。そしてアノ坊ぼやうや。おつかアがゐるな
 くなつても尋ねて泣なのでとあひよ。泣などの直すさ灸あつぶよ。おバ
 さんの處ところに之あつ灸あつが多おほくありますから。大人おとなしくしてお出いでよ
 金かね「アノ。坊ぼやうおとなすくすゆか。れつかちやんとこいお出いでだ
 小三こぞう「おつおさんらのアノ内うちが遠とほうらから歸かへらないと。れと
 つさんにしかられるよト いひつゝ金之助かねのすけをいだきあげ是これが
 名残なごりの悲かなしやと言いねと胸むねは堰せきあげて顔かほを見つめる目に 涙なみだ
 姑しやし詞ことばもなかりしが疑うたがわれんと心付こころづくして 小三こぞう「ほんま
 子供こどもといふもの何なにをなつても無我夢中むがむぢゆう。後生ごせい樂らくなとであ

りますねへト おまひきつて 下へねろし 帯直す顔付も常に變りしや
 うす故紫雲も乳母も何となく。小三の身の上案じられ。か
 しがたさけり 紫「どうも私しは今ッうら。お前を獨り返す
 を見おとせて のが。心に懸つて落付ぬから。今夜と泊つて明日の朝。早く
 歸つたならよさそやな者づ。のうバア うむ「さやうさ旦那
 だとして一ト 晩許りの事。譯をお話し申ましたら。お腹立も有
 升まいから。是非今夜とお泊りさうましなト とめるどバ
 す小三「とうだれぞ。けうまなたへ來るよを旦那よお話
 し申さふんだから。泊つてどふも濟きいよ。それには是非お話

し申さねばならぬ事もあるがら。三松どんでもお借り申て。
 少とも早く歸ろうよ うづ「さやうならお坊さんもお歸りガ
 よふぶづらまず。小僧せんぶりりぞと。ね返し申されせん
 。またくしもお供いたして。龜こ子と又明日見に參りませう
 ねへお坊さん 金「フウ。をア。坊歸ゆのいやくだよ。龜ン
 子の處へ泊ようよウ うば「あづ者どうも困り切事だ。ど
 ういたしたらよろうやら 紫「そんなら斯しませう。坊と乳
 母とお泊と極て。おりかさんよい三松に久助を付て。上やう
 よ。夫は案じる事もあるまら うづ「さやうならどうぞうだそふ

一讀 不覺 淚溢 紙上

なすつて下さいませ。ヤレ、これに落付まされ。みなみ
どする 小三と紫雲と金之助に。名残の詞が置みやげと
袖にうく 小三とようあらあゝ御機嫌よう。御厄介でもご
さいませうが。金不らが事をお願ひ申しませ。バ、アそんな
ら頼んだよ金ばらやあつかアはモウ行くら。大人敷して機
嫌よくお遊びヨ。あづくだよおさらばよト のこるりたな
いとまごひし 輪回の伴に引されて盡ぬ名残のやるせなく。
て立出れば 紫雲も乳母と諸ともお。金之助の手とひき門口迄。別れを惜
み送る身より。送らる、身の 此世から暗と冥途に旅の空へ

消行ものと悟りしも。尊法の道を。授たる身故
御佛の。眞身の姉に導きとせせて賜はるものにやと。ふり歸
りては目よ涙。哭音を忍ぶ親鳥の。離に別る、思ひにて。氣
も絶々になる鐘の。無常の風に響き来て。耳を貫ぬく入相に
驚かされて氣を取あはし。心弱くて叶としど。別れて社
販りける。去程に金五郎の今朝小三に別る、時。常に變りて
名残がをしまれ。歸る心のつらありしが主人持身の儘なら
ねバ。詞を契りて別れしのだ。その夜は夜詰の番に當りて。
出る事さへあらざるゆゑ。心ならせもどや角と。案じとびて



も詮方なく。明る夜遅しと待兼て。涉殿より内へ歸りても。
 胸噪ぎの常なやねバ。食事さへせき着物を着代。青柳橋まで
 急ぎ来る足も空に飛が如く。小三の許へ來り。ハのやうく
 日の出の頃なるべし。また 入口の戸も明ねばさては何事も
 なから戸口をとん 金五郎「ナイお竹起ねへう。モウ日が當
 づて居せれ竹々ど 下女のおおきろき お竹「ハイ 旦那様で
 こざりまそり。チャク 大きに寐過しましたト かけがねは
 れバ金五郎の内金「坊主のどうしたまご起ねへか。小三の
 へとびこんで 病氣が悪かアなかつたり お竹「ハイ昨日の大きにお快よい

とつて。お坊さんぼくを連れつれ運こならばつて向む島しまへ入いらつしやいま
 したが。お坊さんぼくの乳母おんてとんと湯ゆ一處いちに停と留りでお獨ひりあ
 ちの男衆おとこも送おくられて夕ゆふべお飯かへりなさいました金かね「ナニさ
 のふ金かねばらを連つて向む島しまへ行いたか。よく歸かへつて來きたのう。それ
 じやアくたびれてまだ起ねへのだらう。いひつし小三こさんのね
 あけてひと「ヤハハハトハびつくりぎしり。後居しりお倒たるゝ物音ものおとに。下
 女おんなのお竹たけも何事なにごとにやと駈かけ來きたりてやうすを見みれば。小三こさんの白
 無垢むくを身みに纏まとひ。いつの間まよら自害じがいなしけん朱あけに染そめて死
 したる躰たに。同おなくわつと愕おどろきて倒たれてこなくく顛よへる。金かね五

者 亦吃驚

郎おの狂氣きやうき金かね「小三こさんナせ死しんだらうしたのだ。氣きが狂きやうつたの
 のどどく。コレこレこ小三こさん。小三こさんくトだきおこしよべどこたへもと 虫むしの息いき
 さへなき故に。さすが男の心こころも亂みだれ。泣聲なみごころ曇くせなみぶと 金
 「コレこレこお竹たけ。てめへが内うちお一處いちに寐ねながら。小三こさんが斯かいふや
 うすがあつたらら些ちとい知しれそうな者ものだのに。しらすふ殺ころし
 てままつたか。情なげねへとをしてくれたト ぐちをいふのも此
 時とき桑川くわがわの若者わかしもの。清助せいすけ佐助さすけも駈かけ來きたて。愕おどろくと大おほ方なたならせ。何なにの
 ともあれ向むか島しまへ知しらせんとて。佐助さすけを紫雲しうんの所ところへ走はせけ
 れば。紫雲しうんも乳母ちちも仰天おぼろして。金かね之の助すけを連つ駕かこに打うち乗のり。飛とがと

くも駈來りて。小三の姿を見るよりも。餘りの事の悲さ
 夢の實か辨兼て涙に咽ぶをかりなり。紫雲の顔に袖押當。
 聲曇らせつゝ、金五郎も。小三がさのふの様子を語り。金の
 助の行末迄を。とみ角憑みて別れ路に。名裂の涙の盡ざりし
 も斯いふ覺悟を極しもある。情なや悲しやと歎く傍へ書置
 のありしをうづり。うづり「コレマア御覽じまし。書置迄こん
 なになつて。お果なされるのよく〜お事。どの申シながら
 いとし盛りの。お坊さんをあの世へ捨て。跡の歎きを思しめ
 さぬの。あんまり聞へぬお願欲お狭い心でござりませたト

しじうな咽びる。金五郎の男子ながら。共に心も消々に。
 ぞだに。歎きお沈みうつとりと。夢現とも分ぬまで。惜さやる方か
 りしがさすが。さかしき生れ故。武士の身で返らぬとを。繰
 返して歎くこと。人の思ひくの面目なしと。やう〜思ひあ
 さらめて。かの遺置を手より上。開きて見れをこま〜と
 我身のためと家の爲を。思ひつめての覺悟の文体。讀むよむ
 程後悔の。身を切るゝよりせつささに。斷念ても又涙くむを
 しべたゝき。金五郎。老少不定の世の習ひ。聖をもしらぬ身
 胸をなで。の上だと。昨日小三がらつゝのが。思へば紀念の言となつた

讀者、亦、如、夢、

の。浮世の義理とおれがためを。思ひあやみて先だつ不便さ
 亡跡の事迄苦勞にして。意見まじりの此書置。よむ身にな
 らうとは氣が付なんだ。いつう世に出し人あみの。樂なくら
 しをさせてへと。思つた事も氷の泡。子供の時からけふが日
 まで。かわらや一日樂もせず。日影の身にて苦勞をし死。死
 んぐ苦勞の原のといはべ。おれが片時内に居ぬもる。親に不
 孝といひせじと。その身を捨し心ねり。眞實過て怨めしい。
 ことへ一人りで死ぐとて。わが手を掛しも同じ事。死あづと
 しよふのあろうのに。短氣をしたらうら皆なの歎き。吁なんだ

か夢のやうで。返らぬ事だが不便でならねへ。南無あみご佛
 くト。あかうするかは金の介とつく。「おとつちやんナ泣
 のだへ。おつちやん佛ちやんになつたかエ。乳母なせ泣よ
 サ。おばちやんもれ泣のエ。坊おつかちやん怖よウト。泣だす
 あせけなや紫雲も。紫「ほんに此子のかしこい事。誰をしへ
 ねとおつかアが。佛さんにまつたかとい情ない。こんな悲ま
 い事をそるのを。虫が知せさせへたして。さのふ歸すが氣に
 關り。乳母と二人で止めたが。あの時歸さすいなんのママ。
 あつたら命を捨てせやう。歸にも約束飯る身も。みんな定ま

る因縁ながら薄命な妹が身の果やトくりうへしてさあ／＼
 歎き悲しみて。涙に曇も浮べうり。哀れといふも愚なり。斯
 てい果し亡人の。爲にならしと金五郎と。男心を取直して。
 紫雲をいさめ乳母を勵まし。の邊の送りも懇ろよ。七日／＼
 の訪吊らひも。手厚く法會なしにける。かゝりし程に金五郎
 の。幼き金の介が母より別れて。便りなき身となりしを案じ。
 兼て小三が存生より。紫雲の許へ預けくれよと頼みしとば
 もあるゆゑに。日がら立て金の介を。乳母諸共に向島へ預け
 青柳橋の家へ取とた付。残る方なく心を配り。をり／＼紫

雲の庵を訪らひ。金之助を愛しながらも。只小三の事忘れ兼
 家に在時の部屋のみ籠り。お雪にだに是等の始末を。秘
 し隠して語るとなく。氣のひき立ぬも理りなり。白翁初め家
 内の者も。金五郎がこの頃よてい。急かにうつて變りしとく
 夜遊にも出ざるゆゑ。さてい身持の直りしかと。嬉ぶもの
 いらつとて。何か心に案じ顔。屈宅らしくふさぐのを見
 るお付又白翁い。老の身の思ひ過しに。尙金五郎の短氣から
 小三は怪我をさせしもしれず。それゆゑにこそふさぐの。
 小三の身のうへおぶつかなし。いかなるとかたすね行。やう

すを聞て安堵せんと。獨り私かに兩國の。小三が家へぞいた
りける

第九回

朝夕よ。木々の落葉を雨と見つ。冬をバ告る寂しさに。心も
空も時雨月。訪ふ人もなき草の扉へ。友誘ひ來て音信の。水
鶏にあらぬ子雀の。父よ母よと啼聲を。聞ふ附ても哀れ添ふ
紫雲の。小三の亡後を。吊らふ隙に金之助を。慰めてりまた
聞わけの。泣ての母を尋ぬる故。不便の増て可愛さよ。泪の
乾く隙もなし。母にねくれし金之助の紫雲や金五郎ともると
もに七日くの寺まゐりよ小三のはのへ花を

たむけ念佛となへてれがむをバ見やう見まねの子心お内へ
かへりておそふにもさすがらすぢといひきながら菊の花など
折て來つ庭に立さる石をうろろ。金「あんまいく。のち
へたむけてちひさき手をあひせ

やんあんまいく。バアアこへ。來て。なんまいく仕な
よ伯母ちやんもお出よウト。わけわのらね。見るよつけ聞くに
つけ。乳母も紫雲も俱泪。金の助をい。紫「コレ金坊や。又其様
とをとして。伯母さんを泣せるのかエ。ア、梅檀の二葉どやら

やがて成人したならば。孝行者とならうのよ。いたづら壯
りの此子を捨て。死ぶ小三が心の中。ママ何様につらかつた
らう。思ひやるほど後生の障り。ア南無阿彌陀佛阿彌陀佛ト

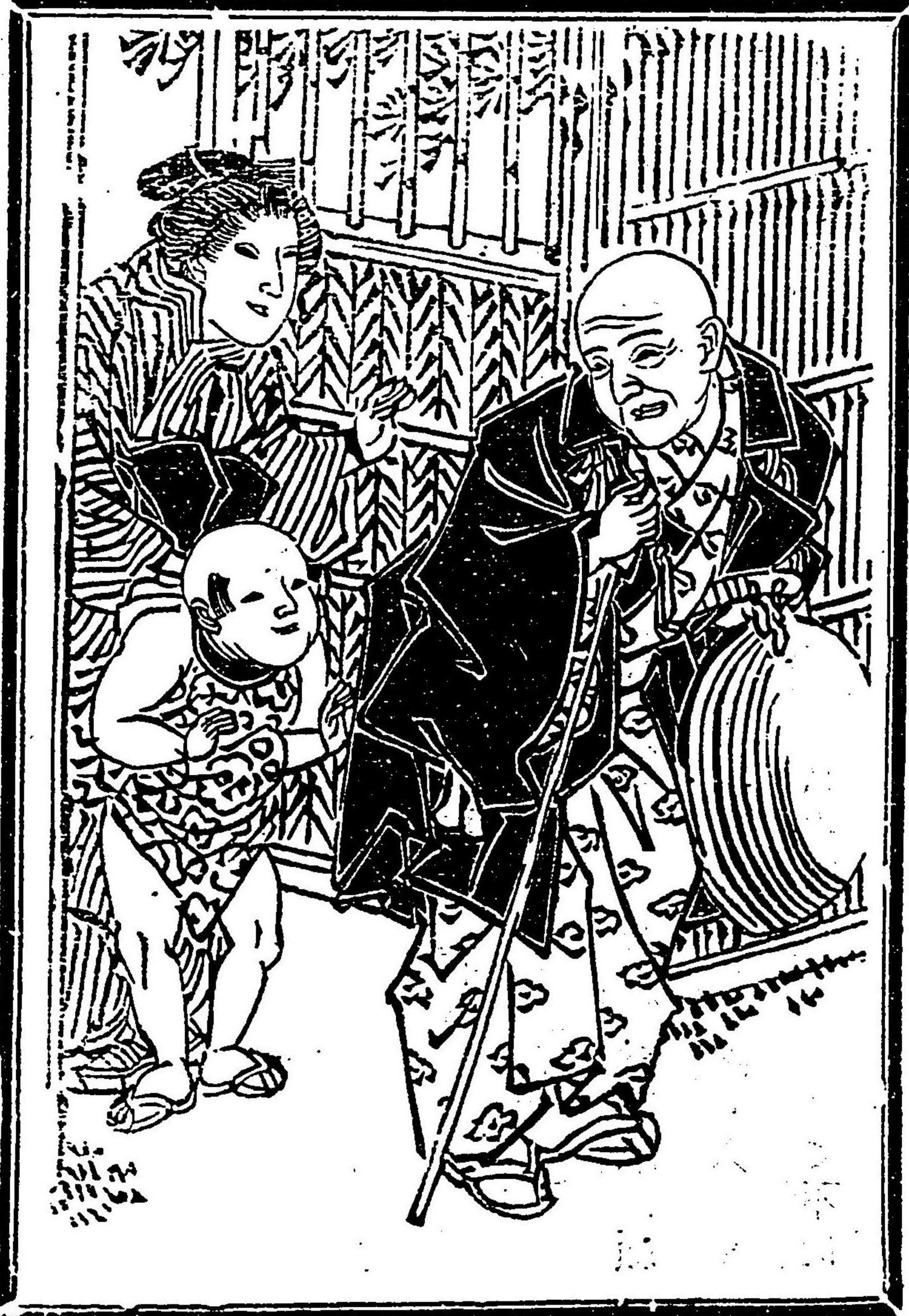
つまぐるじゆずもしめりうらぶ。「逆も歸らぬ縁言と。思ひ
 ちうバもなみごの目を拭ひ直し氣を取直しましても。お可愛想なとを致しましたト
 直し氣を取直しましても。お可愛想なとを致しましたト
 るもとなすもなみだゆゑ。金「バ、ア。お伯母ちゃん處モウ否
 金の助いたいくつして。金「バ、ア。お伯母ちゃん處モウ否
 だヨ。面白くないかヤ。内行らうよウ。お母ちゃんへ行らうよウ
 だヨ。面白くないかヤ。内行らうよウ。お母ちゃんへ行らうよウ
 「又其様を事をいつしやるかよ。お聞別の悪いこゝがお坊
 さんのお宿で御座ますから。内へ行ふ〜とおつしやるも
 ので、御座ひません。金「フウ。坊の内爰であらよ。ね母ちや
 んへ行ふよう。伯母ちゃん。バ、ア、けさいヨ。坊内へ歸や
 せないよ。紫「チ、そうかエ〜悪いバ、アだぞ。ア、併し欺

し騙しても、まだ預世世もない子供だから。内へ歸らうと云
 も無理であら。小三が座敷活業で、何程傍には居ない勝で
 も。三日と離れた事もあいのよ。馳てもう五十日餘り。賑や
 かな處ろで育つた子が。此様な寒まゝい所へ来て。緋鯉や龜
 の子を合手だらう。何様でも遊びに壓るらう。コレ金ばらや
 。お前は利口者だから。伯母さんの云ふとを能お聞。ア、お
 前のお母さんの。それは〜遠うい所へお出だりら。モウ
 内にと誰エもお出でなさいよ。それぐうら内へ行ふ〜と
 云すに。伯母さんの所よ何時迄も居るのだよ。金「坊の母のち

やん死ちんぶから。お寺てらへ行いちまつたりエ紫むら「アイ其その様ようサ 金かね「夫おれだから坊ぼうの内うち無な々なかエ 紫むら「其その様ようサ。能よく解わかるかぞ。夫おれだから爰こゝの坊ぼうやの内うちだよト ううバとふたりでなぐさむ「モシ貴あな嬢ぢやうへ。何どこ處ところのか御ご隠いん居き様さまが。お目めに掛かりかいと云いつて入いりつしやいまし
 たヨ紫むら「さうウエ。夫おれなら何どこ方なただのママ庭にわ口ぐちからお通とほし申まシ
 な 下した女によ「ハイ〜ト 出いては口ぐちへまわりしをり戸とひらきこ
 るの金かね五ご郎らうが 自みづか「ヤレ〜よい御ご住ぢゆう居きじや。ママ御ご免めん下くだされ
 祖父そふ白はく翁うんなり トとざしきへとはり「借かハヤ私わたくしと金かね五ご郎らうめが祖ぢゆう父ふで御ご坐ざぐ。借か
 座ざになりて 此こ方なたさんんの。小こ三さんどの、姉あね子ごと云いと故ゆゑ。聞きた事こと話わしたい

事こと。山やま々々あれバ孫まごめに隠かくれ。態わざ々々尋たづねて參まゐつたが。お差さ合あひ
 れ客きやくの御ご坐ざらぬト いふは紫むら雲うんもよろこびながらなにかや
 つか 紫むら「是こゝ〜 何どこ方なた様さまかと存ぞんじましたら。金かね五ご郎らうさんの
 お祖ぢゆう父ふさん。よふママお出いで遊あそびした。何なんにも御ご遠えん慮りよな者ものの居を
 りませんのら。何なんありともお心こゝろ置おなく。お話わしなさるが宜よろし
 う御ご坐ざりますト やさしさとばに白はく翁うんの老らうの目めやにを 白はく「ヤ
 レ〜姉あね妹いもどの云いひながら 小こ三さん殿どのに生い寫しやうし お前まへの顔かほを見み
 るに附つ々々涙なみだがモウ前まへ立たやうしや。初はつ何なんからヤさうやら。心こゝろの
 内うちごとり込こんで前まへ後ごするのも老らうの癖くせ 退たい屈くつながら一ひとト通とほり

話を聞いて下されや。その子細といふの知しやつた通り不
 思議な縁で金五郎と小三とのと深ふなり互ひに思ひ思ひ
 れ、バこそ深切づくが苦勞の種大概お惚合てゐたならば
 人の思ひく世の義理にも係へらきに楽しみだるうに。あん
 まり可愛がりいとしはまられうら孫めもその情に迷ふ
 て内を外の泊夜りとなり一ツづ、年の取ども放埒が直
 らぬ故 始終の極りぶ案ぢられて。意見のまても糠に釘。豆
 腐にのすかひ聞ぬが儘よと。捨て置てと爲にならず。及物も
 折々磨あければ。錆付て切れぬ。道理その。錆を落すに。普



通の世事の合せ砥でと。逆も切れるとでとない。と。推量をして見る時は。わしが心の荒砥にうけても。切らぬのあらぬ浮世の義理れ雪と云ふ孫娘と祝言迄為せたから。逆も添れぬ悪縁と思ふた故に孫めに隠れ。ア、何時で。あつたけな。小三殿の内へ尋ね行き。始めて逢ふ。其席で。喜ばせもせを孫めの身の上。斯々云ふ譯あれ。長ふと云はぬ程に厭でもあろうが暫時の間とらうぞ縁切て下されと。無粋な酷い頼もそバ聞て涙ぐみに咽なづら義理と思とを聞譯てふつゝり思ひ切ましよと。云はれた時の私の胸嬉しさ餘て不便

あと。小三殿の心の中。嘸つらかる悲しうると推量れて侶涙。ア、浮世が儘になるならバ。容貌と云ひ利發と云ひ。溫柔心の生れ附。孫めと夫婦よしてやつたら。嘸マア互に嬉しうと。思つと許りで夫も叶とす。是非も泣々歸つたが。夫り後ハ金五郎めも。そのくはる様子もなく。内に計かり居る故に。情と心が直りしのと。家内の者が喜こんで。機嫌と取程變ぎ顔。じれてハ部屋に閉籠り。何の屈宅な様子と見てハ。又案じらる。親の常。両親の者もむ雪めも全なじ様も苦勞あれバ。私も矢張氣あ掛り。考へて見る程合點が行ず。若

金五郎が若氣の癖で。愛相づかしの腹立紛れ。疵でも付て。騒動を。出来した故に鬱々かと思つて見れば片時も。案じに胸が休まらず。態々青柳橋へ尋ね行て。見れば思ひも附ぬ人の。栖家と爲て勝手口も。變つた事で引越せしむと。當りの人に尋ねしに。小二どの知人よや子迄おしたる身ながら。も。男の爲と義理づくで。身を捨られた天晴貞女と近所の者迄其當座は。皆惜がつて泣きたと。涙ながらの物語り。聞て突胸の私が屹驚。悲しさ不便さ遣せなく。其捨られし子の行先。聞けば眞身の姉子の所ろへ。引取られしと云となれば

。悔みも云たし様子も聞たさ。孫めが顔も。イヤ孫ではあひ彦て有る。見ねの心も落附ぬ故。駕籠を飛して漸々來ました子までぬる身と知らる。何の酷く縁切らせう。なま中包み隠されし。今と爲ての却て恨み。年に不足のさい私ガ。長命せきバ此様に。悲しい泪は漏さぬ者。何の因果で生延の思へバ年も恨めしいト。老のなみぶを。愚痴になるのも斷りなり。紫雲も概略聞取うち。ともになみだ紫「母んに妹が薄命は。約束事とは申あがら。子迄おしても日かげ妻一日半時入並の。息をも吐ぬ苦勞を仕死。私しとても眞身と云ふい。天

ふも地ちもも小三ひせ獨り。力ちからに思おもふ甲斐かひもなく。杖つえに離とちれし今の
 悲かなしみ。忘わすれ紀念きんねんの金きんの助すけで。少すこしの戀こひも晴はりますが。まごま
 ア眞まことも頑ごん世けんせもなく。明あけても暮くれても母ははを慕したひ。泣なくに附剛情つげきじやうに附
 達者たつしやで居ゐたなら何様なにかう此様こゝろと。思おもひ出でして。全おんなく様やうに。泣ないて泪
 の乾かく間まは。ほんに一日いちにちも御座ごまりませぬ 白翁はくわう「イヤモウそり
 や云いる、迄までもあい。お前まへの胸むねを推量おしりやうはるぞ。私わしが胸むねも張裂はりさく様
 で矢やも猪たても堪たまる事ことちやない。マ。夫それの左ひだりもあれ。孫まごめが悴せがれ
 の何處どこに居ゐる。一寸逢ちよつとあひたい逢あひせて下くだされ 紫むら「ほんに左様さやうで
 御座ごまいました子こ。金坊きんぼうの奥おくにお出でかエ。乳母ばいあ一寸連ちよとつれてお出でト

よびつてられて金之助きんすけはう 金きん「伯母おばちゃん。坊ぼうお母ははちゃんね
 ばよりささへかけさうり 出でづと思おもつたヤ。余所よちよのお祖父ぢいちゃんだ子こ 紫むら「是これはしつたり。
 餘所よちよのれ祖父ぢいさんでないヨ。是これは坊ぼうヤのれ祖父ぢいさんごか
 ら。手てをついてお辭義じぎをおしよ 白しろ「ヤレレ〜柔なごちしい善子よらこじや
 ドレ〜祖父ぢいの側そばへ來きやれ。チ、能よ云いとを聞きぞ。夫それぢらお土
 産やを遺やましよ。サア〜手てを出でしやれ。チ、手てへ〜ガよく
 出來でたぞ。ヤレレ〜可愛かわい、能子よらこじやナアト 白しろ「さほ出でしやれ
 さいといいて 金きん「伯母おばちゃんコレお菓子かしお祖父ぢいちゃんお呉くれ
 うれしうに 紫むら「チヤ善よお菓子かしをお頂戴いただのう。
 有あり難がたう。御座ごまいますらゆ 紫むら「チヤ善よお菓子かしをお頂戴いただのう。

よく忘れずお禮を申たぞ。よいお祖父さんを持って坊は仕合せ者ぞぞ。白「ハハハ、イヤ此坊ヤを見るに附始めて逢た私でさへ。可愛くつてならぬもの。幾何疾深く意見をしても。金五郎めが聞かぬも道理かエ増て小三どのの女の事。此マアいたいなすを直て飽れもせぬ中で男の爲ど身を推られたい。貞女とも天晴とも。賞ても是が稱盡されうか併し眞身の此方さんの身に取てハ此爺を。鬼ども蛇ども惡魔ども。態マア憎いと思はつしやるが。その云譯では無れども。此子を内へ引取て。晴て金五郎の悴と披露し。小三殿の

亡跡も。懇おろに用いせましょ。攻ては夫を慰めに。思ひ諦らめて下されト。あみごふさ〜いひけれバ紫雲もうれした段々厚い思しめし。何とてお恨み申まませう。皆を過世の因縁ゆる。どうも仕方御座りません。夫に附ても姉妹が。身の上の概當を。お話し申すもお耻しいが。私共が生立は。彼様〜で御座りますト。兄弟二人母あきゆる小三が身の生身も共に情にて親に。其恵にて里に行しが。早く父も死別れ。里親に欺されて。浮川竹に沈みし事。小三も金五郎と共に育ち。互ひに末を契りしよ。金五郎の本家へ養子とされハ

便りなき身をかこち。心狂ひて鴨川へ。身を沈めしが不思議に助かり。悪者の手に渡りて。遂に同じ花街に賣られ。唄妓と爲て活す中。縁ありて金五郎に廻り逢しより。二世を盟りて深くなり。遂に子供の出来し故。身請をされて圍ひきしと又その身も全し頃。去人に受出され。去の別荘に養われしが。便りの人に早く別れて。願ふ佛門の志願起り。髪を剪り尼となりつ。世を逃れて暮す中。妹が身の薄命から。浮世の義理に狭められ添事あらぬを覺悟して心強くも身を果せしと。昔男の爲を思ひ操をす抜く念心し。妹がらも天晴貞

女。只一ト筋の不量見と。思召すよ心の中推量してやつてくださいました。いぢぶしうをつまびらかに。白扱々姉妹揃いも揃しし。貞婦と云ふか。義婦といはふが殊に小三と幼い時より。金五郎と一處に育ち。家出して死ぶと聞た。養娘のね龜であること夢にも知ぬが大きき過まり。そふいふ譯のある事を。養子の身ゆる金五郎も。遠慮して人にも明さを獨りで苦勞をして居たかと。思へば小三金五の中と。金五郎が胸の中が。不便でどうもなりませぬト。思ひやりつ、うもなみぐにせさかねて。ともにないての物がたり。へあしひあみだでいりどらず。うむもつぎの間で金の介を。ねかしあ

がらのもらひなき。しやうじふすまの
 明たても。なみだでしめるばかり也。 借も白翁の泣々紫雲
 に別れを告。家お歸へりて金五郎の。兩親初めお雪も小三
 が成行紫雲の身の上。金の助の事迄も。委敷語りける程お皆
 諸共に涙に暮て。小三を惜まぬ者いなし。此上の少しも早く
 忘れ紀念の金の助を。引取て小三の亡後懇るに弔らんと
 て。金五郎にも此由を相譚ふに。喜ぶと限りなく。夫より日
 を撰み向ふ島より。金の助を。乳母諸共に呼迎へ。お雪の子
 とちして愛しみ。小三の世よなき數に入れども。改めて先妻
 と呼稱し。佛事も手厚く行ひければ。金五郎にいへばさら也

。紫雲乳母も上なく喜こび。家内の者も朝夕に金之助を掌中
 の珠と愛し。只健壯に成長するを。指折數へて暮す程も。早
 くも小三が百ヶ日に當りなれと。金五郎の寺も詣んとて金
 之助を乳母に抱かせ供の男と引連て菩提所へとて出行ける
 あとよお雪は下女ととも金五郎のへやをかぶつたを
 時下女あやまつてたばこを打かへしけるとづみに引
 出しよりさまじくのほぐの出し。又取り入れんとする中
 に女の文のらめりし文出しか。下女とこれを手とりあげ
 ちひさな下女「チャヤ」御新造さんへ。一寸御覽遊ばせ。女
 中のお文が御座ましたよ。お雪「ドレれ見せはんよ。ねへ。チャヤ
 常のお文だと思つたら。書置の事としてあるのら。こりやア

小三さんの書置かき置きよ。悪い者が有あつ子エ。モウ是を見みら中ちゆうを讀よまないのに胸むねが。一をいになつたヨ。下女「チヤお書置で御座ごいましたかへ。ほんよ思おもひ出だしてもね可愛想かあいそうで御座ごいます子エ。お雪「そうよ大おほう。若旦那わかだんなの事が。種々書いてあるごろうから。見たみたさも見みたいが涙なみだの種たね。夫それよ不圖ひよつと知しれでもしたら。ね腹はらをお立たちなさると悪わるいから。マアくよしにしませうトしまはんとするところ。母「お雪ヤモウ今いまに金五郎も歸かへるへ母おやが出來きりて。母「お雪ヤモウ今いまに金五郎も歸かへるだろ。早く此處ここを片付かたづけてね仕舞しまい。お雪「ハイモウ仕舞しまいしたアノ阿母あつかさん。一寸是を御覽ごらんなさん。誠まことによい手で御座ごま

すねへ。母「ドレレ。チ、書置かき置きの事ことア、小三どの、書置かき置きかエ。又また其様者さまを見附みつけ出して。お雪「夫それでもお杉すぎが見附みつけしたも。の。開ひらいて見みましても宜敷よろしう御座ごませうか子エ。母「不遠慮ふえんりよなれど。餘あまり可愛想かあいそうだから。一寸計あけり明あて見みなナ。アノ杉すぎヤ。お前はまへのお煎花ひさなの仕度しだをしていくれヨ。下女「ハイ。承知かしこまりましたト。下女したむすめの勝手勝手へ立たておくお雪ゆきのこの逢あふの別わかれの初はじめと。豫かねてより人の身みの定さだめなきに引ひくらべ覺悟かくごいたしをり候まひしにやうやく只今ただいまたもひあたり候まま、この世よの御名殘ごなごに一筆書殘ふでかきのこし。まづとや御平ごたい

らかに滂くらし被遊候滂事此上もなふ滂よろこびア上ま
 ゐらせしさてとやとが身事いやしと賤のふせ家に生れ草
 葉の露のはかたき身を滂父君の滂情にてやうく人とな
 りしゆ恩のほど海と山も詞には盡しがたく夫のみな
 らず親姉までの命をつなぎに惠かの淺からぬ滂事いつの
 世にかむくひまゐらせんやうもなくあまつさへ一日のほ
 恩もふくらずかへつて滂辛勞れみかけまゐらせしこの身
 の罪の深き事や上ぐやうも滂座なくしえにし神のむ
 すべせたまふ滂ととよやとよりいやしきわが身ながら

も君の御情あつくりよりひとりのたならぬ御氣が
 ぬのみおそびしとふらふもみなわが身故と存しゆへを日
 もよもあられす只々つたき身のみうらみなり御祖
 父さまをいじめれ雪さまにもさぞくわが身を滂にくし
 み御うらみ被遊しいいてく君の御ためあしおらむ
 と行すゑのとぞんじつかけ候へばなごらへを聖候やどつ
 みをかさぬる思ひにて後の世さへも空おそろしく又この
 うへにのすくの御くろをかたまゐらせてもいなりがた
 くせめての我身を果し候いすゑと君の滂てゝるもや

すかるべしとくより覺悟かくごのさめまゐらせ候へども女
 心の淺あはましく御名殘おなごりのみをしまれてけふまでなごらへを
 り候多事たごまとに〜御おんいづかしく存上ぞんじやうり〜只々ただただ此このうを
 いた雪ゆきさまと御中おんちゆうよふ御祖父おぢいさま様御おんはじめ御両親りやうしんさまへも
 御孝行かうぎやうのはぎねがひ上あひまゐらせ候二ツに姉事あねごとの御存おんぞんじ
 の通りとほまとにたよりなきみのうへこれまでいおよむすな
 からおたがひよ便たよりにいたしとり候へども未々まゝの猶なほ々々
 よりなき身にさふらへい何なにとぞ御見捨みすてなふ御めをかけ被た
 下候さげやうねんじ上あひまゐらせ候又また金之助事かねのすけごともぐわんせなき

こんむくものよとふらへはわが身みさきのちいたづねび泣なみ
 むづかり候半はんと今いまより目めよ見み候やうよてみれんなが
 らふべんにぞんじ〜姉方あねがたへ一昨日さくじつまゐりよそあから
 いとまごひのついでに金之助かねのすけの事もよく〜頼たのまおき候
 へはあのかたへ御あづけ下くだされ西東にしひがしもわかり候やうに成な
 候と〜母ははなし子ことて人ひとにわらいれぬやう手てならひまどよ
 く〜御をしへ下くだされべくかへす〜も君きみの御身おんみもち只ただ
 今いままでのやうなる御こゝろにてい御ためあしく候ま〜是これ
 より御心おんこころを入れかへむりなる御酒おんしゆを御おんにこし被成たもす御宿おんやど

にのとお出いでわろせしれ雪ゆきさまよも無理むりなる御事御申ごごしごごしなさ
 れぬやうねがひ上あがまおらせ候猶なほこのうへのねがひにのち後
 の世の御事に御座候百ひゃくとせの御よごひ過すさせたまひて未
 來こゝろのひとつつのちすすのうてなこそひとへへ願ねがひ上あがりま
 とおをさなき時ときより汚よごしたしみや上あが時の間まの御ごまかれだ
 に心こゝろうくぞんじさふらふよかくながき汚よごわかきとなりさ
 のさまある汚よごるるういたいたたき候ごのいなるむくい因果いんぐわよ
 やどくりかくしまとににく汚よごななをりをしさいいんかたな
 くこゝろもみだれさふらふて申上まを度御事たごごしの濱なみの眞砂まごしの盡つぎ

せねを明あけがらちのさかねの音ねに死出ししでの山路やまぢへ心せこゝろをし

と筆ふでとめとめりりと

道みちしらぬくらきよとぢへ初はつ旅たびの

身みの御佛ごぶつを力ちからにぞして

とよみ終はつり。お雪ゆきも母ははも諸兵もろへいに。目めを泣なみ煙えんして顔見かほみ合せあみ
 袖そでにふさ母ははア、ヤレレくくよよしない文ふみを明あけて見みたもへ。悲かな
 ながらながらししるも悲かなし胸むねが迫せまつて。大おほさに泪なみだを漏こぼしました。金五郎きんごろうの迷まよ
 ひしももつこもつひじん尤もつこもつひじんな善美人ぜんびじんだど。お祖父おぢいさんさへ小三せうざんが容貌かうぼうを。お
 賞ほめなさる程ほどな生うまれ附つ。客貌かきようの格別かくべつな事ことが。心こゝろだてと云いひ此この



手蹟まで。美しくしむとも見事とも。約束事といふものゝ。
 若死をする故に。人に勝れて生れて来たのか。金五郎の爲を
 思ひお前に義理を立通して。名を汚さない貞女の鏡。ほんに
 お雪や。必らず仇に思なさんナヨ。此書置はお前の爲に。實
 によい手本だヨ。此様に金五郎を大事にして。道を立るが女
 のたしなま。金坊も鹿略にして。濟ないヨ。お雪「ほんゝ左様
 でございます。私くまも人並よく氣の附様を生れなら。此
 様な事にはなりません。まいに。因果き事で御坐いままたト。お
 子二人がくやみなさなみぐよ袖をし。下女「若旦那様のお歸
 ぶりけりをりから下女がはせ來り

りトつぐるに母 お雪の手早く文を仕舞。泣顔隠して出迎へ
 金五郎の顔見て「お雪何様したのう。泪ぐんぐん顔附が。い、
 ア大きな形をして又阿母さんに叱られたの お雪「イエ、其
 様事での御座いませんがト 手もちあさゆゑる アノ金坊と何
 様致しましたエ 金五郎「ババアと先へ奥へ行たト さもりを
 びをしめ ア、ヤレ〜 勞びれたぞ。ほんにお雪今日のはの。寺
 参りをして直に向島へ行たら。紫雲さんのお傳言があつた
 せ。おめへに金坊を運て些と泊り掛に來いとヨト へども
 ちひいてハイといつたばかり 金「ハテ何も私とお前の様子
 ゆゑ金五郎はふしんにおもひ

が解らねへが。何を其様よ悶ぐのなるう。は、ア聞ゑここり
 やア何だのおれが小三の寺参りに行たから。それで瀧に障
 つたのどの お雪「何様致してまわ其様事が 金「心に無りあア
 何様いふ譯ぶか。心を置すと言て聞せな。一生添ふと思ふあ
 は。隔てぬでこそ夫婦と云ふもの お雪「其隔てるどいふ事の
 誰か私しに教へましたの 金「まんの事たな。此方の其様事
 はねへもの お雪「外の事の兎も角も小三さんの事ばかり
 を金「隔てたといふ事か お雪「ハイ夫故にこそ此悲しみ。先
 から私しに斯々だと。譯をお聞せなまづつたら。貴郎にも御苦

勞を掛すすまいのに金「なんだナ。又思ひ出しの様に。モウ
 幾何云つても始まらぬへ。みれんう大概よ止てくんな お雪
 剛情様で御座いますか。何に附彼に附て。常々忘るゝともな
 く。みんな私しが愚か故だと。此身を恨んで居まそが。今日
 の取別いごもより金「百々日づけ氣ふあるか お雪「又其様と
 計かり。お疑ひが晴ませぬから。申しますからお腹をお立遊
 ばしまそなヨ。アノ貴郎のお留守の中。お烟草盆の引出し
 から。小三さんの遺書が。出まそた故にツイ一寸金「見たの
 で氣色も障つたらう お雪「何程愚かな私しでも。先から深い

譯ある事を。知つて居たら何様でも致して。貴郎のお側へ小
 三さんを。呼ます事も出来ましたらうあ。なせ隠して下さ
 いました金「モウ何の様に云とて迎も歸らぬ繰言ぐ。小三
 の事を隠して居たの「私か一生の誤りごから。堪忍してくん
 な。年もいかねへお前に迄。種々苦勞させたのも。皆な因縁
 約束事。この上は云迄もねへが。金坊を可愛がつて遣てくん
 な。アノ何ごかひよく鬱で来たお雪おめへい子ごから。茶
 碗よ一盃酒を持って来てくんな。そのうち一寸くり奥へ行て。
 みんなの機嫌を取て来やうト はれりをひっかけ奥へゆくお
 雪の酒をもち来れば金五郎も

へやへか「お雪ゆき金坊かねぼうのの祖父ぢいさんの側そばに媚こび付つて居ゐて。好すき
 ねぶり事ことをして居ゐせ。お雪「左様さやうで御座ございますか。お祖父ぢいさん
 めいよいよお合手あてで御座ございます。ハイ貴郎きろう御酒ごしゆをト 茶ちやわんをば
 せいぶ金「ナット有ありがたし御苦勞ごくろうだつたと 手てにとりあげて
 ぐいとのむもゑ 「チヤ貴郎きろう召上めしあるのさらあつためてまればよふ
 お雪ゆきのびつくり 金「なアに冷ひやでもいふ。是こで氣色きしやくが直なつたや
 座ざままちち 金「はんに其事こともの書置かき置きに。筆ふでと筆染せんじて書かいて有ありまし
 たヨ金「そふぶつのうらすつでものぐら香のでり。小三せうざうに
 酷ひどく氣きを揉もせたが。ア、今思いまへは是これも後悔こうかい。モウく沸ふつり

止やめする。思おもへは小三せうざうのの為ため。善知識ぜんちしきでもあるだらう
 何かなにつけて身みのおこなひをあらためるのも小三せうざうのの貞
 心まごころ大おほに通とおせしめぬにことあつたれ賢女めいといひつべし
 是これよりして。金五郎かねごろうのの主君しゅくんへ忠勤ちゆうきん怠たるとあく。白翁はくおう初はつめ両
 親おやにて孝かうを盡つくすと日にまし厚く。お雪ゆきも中睦なかつままくして。
 金かねの介まがを愛育あいいくす。紫雲むらさきぐもの庵いほりも四季折しきおり々々に。訪とひおと信て疎
 遠えんせせび。忠孝信義ちゆうかうしんぎ全ぜんき故ゆゑに。家内かうちよ和順わじゆんの基もとをしきお雪ゆきが腹
 ふも子こを儲たくわへて。幾千代いくちだい万賑まんげんのの益えき家富榮かふちやうののけける。の
 る目出めんでのの因ちよみに依よりて。金五郎かねごろうが實じつの親おや。文ぶんの丞じやうも年ねん來らいの
 勘氣かんきをこの時とき免ゆるされしかば。京師みやこの家いへにて養子やしをなし。その

身みの直ただに東あづまへ下くだり。親族おうちやから券属たいめんと對面たいめんして。喜よろこぶ中なかも小三こさんの身みの果はて聞きて悲嘆ひたんの涙なみだに暮し。頻しきりに無常むじやうを觀くわんする者ものから。終つひに髪かみを刺佛門とりのつらに入りて。身みを雲水くもみづに任まかせつ。諸國しよこく行脚ぎんぎやくも出いでしと
きん

小三金五郎娘節用 大尾

明治十五年十二月廿日翻刻出版御届
同十六年十月十三日再版御届
同十七年十二月十二日三版御届
同十八年十二月廿八日四版御届
同十九年一月一日發賣

著者 故人 教訓亭爲永

翻刻人 春陽堂 和田篤太郎

岐阜縣平民 京橋區南傳馬町 二丁目十四番地

正史 實傳 いろは文庫 全一冊 定價二圓 郵稅五十錢 已ニ出版

人情本出版目錄

爲永春永編

○小三五娘節用續編 全一冊 正價廿五錢

○おくみ江戸紫 全一冊 同廿錢

○美人情磯馴双紙 全一冊 同廿錢

○尾上春色意味張月 全一冊 同廿錢

○實話合鏡心の善悪 全一冊 同廿錢

右ハ東京新誌記者ノ粹筆モテ細カニ設評セシ艶書ナリ乞續々御愛讀給ヘカシ

定價金四拾錢

